

目次・Content

LAP とは	02
プログラム構造図（南京モデル）	03

リベラルアーツ、古都へ 南京大学集中講義学生交流

概要	05
参加者の声—南京大学学生	06
参加者の声—東京大学学生	08

リベラルアーツを体験・実践する 東京大学一週間体験プログラム

概要	13
リベラルアーツを体験する	
東京大学の授業を受講して—参加者の感想	14
リベラルアーツを実践する	
学生による共同研究「空間と記憶」	16
コラム・茶事のミクロコスモスと茶道体験 宗和流・宇田川宗光	17
チーム 1. 有形な空間と無定型の空間における記憶	18
チーム 2. 都市シンボルのイメージ・空間・記憶 —東京タワーを例に—	22
チーム 3. 空間の記憶・記憶の空間	26
チーム 4. 記憶の反映と相違	30
2011 年学生交流に混じりながら 渡辺雄一郎	34
共同研究の発表を受けて 渡邊正男	35
参加者の声—南京大学学生	36
参加者の声—東京大学学生	40

東京大学・南京大学交流の 10 年目を迎えて 南京 DAY in 東京大学

概要	43
特別記念講演	44
「日中文化観の差異について—『詩言志』と『脱政治』を終えて エリス俊子	47
南京大学におけるアカデミック・ジャパニーズ教育—日本語教育者による交流 ボイクマン総子	48
肌で感じる東京 参加者アルバム	50

LAP 歴年講義テーマ	51
-------------	----

LAP とは

リベラルアーツ・プログラムの概要

LAP の活動は、2004 年に海外拠点として設けられた東京大学リベラルアーツ南京交流中心にさかのぼります。この拠点を基礎に、2005 年から南京大学と連携して、毎年 3 月に表象文化論・集中講義を開催するなど、一連のリベラルアーツ教育の発信事業を行って来ましたが、2009 年に EALAI から中国関連プログラムが独立する形で LAP が発足したことによって、LAP は、教育交流プログラムとして新たな方向性を打ち出すことになりました。それが、文理融合型の教育コンテンツの構築、駒場と南京を循環する連携教育、そして学生の相互交流です。これらの事業を通じ、海外連携校との教養教育交流モデルを構築することが、LAP の活動の目標です。

LAP は、南京で行っている質の高い事業をひとつのモデルとして、葡萄の房のように、多様な国との交流に広げていきたいと考えています。LAP が南京で行う集中講義と交流事業が、その房を作る最初の一粒になることを目指しています。

今なぜリベラルアーツか

日常的なふとした疑問から社会問題、民族問題や地球規模での自然災害に至るまで、私たちの身の回りには、自ら考え行動しなえればならない課題が山積しています。その時求められるのは、知識の量ではなく、既存の知識を疑い、新しい考え方を生み出す思考力と、それを適切に運用する判断力や行動力です。大学教育は、このような多様な問題に対処できる人材を養う場として機能して来ましたが、しかし近年、各学問領域の専門化が進んだ結果、専門知識を身につける場として見られることが多く、研究内容のタコ壺化が問題視されています。

リベラルアーツ教育は、このように高度に専門化した研究に対し、文理融合の領域横断的な学問の場を提供して、相互に刺激しあうことを通して、自由で新しい発想を生み出し、知識よりも「考えること」を目指す教育です。それに加え、東京大学では人格形成を教育目的のひとつとして掲げています。学問の場においても、そして多面的で可変的な現実に対処するためにも、リベラルアーツは、今必要とされる大学教育の在り方なのです。

LAP が目指すリベラルアーツとは

リベラルアーツは、大学教育の基礎であると共に、最先端の研究領域で新しい発想を生み出すために必要な要素でもあります。大学教育の根本は、様々な問題について「考えること」にあります。専門化が進んだ領域においてこそ、他の専門領域の着眼点や方向性を吸収してより多様な視点から発想していくことが必要になってきます。リベラルアーツは「どう考えるか」を扱う教育であり、その特徴は、ある課題を解決するために、多分野を横断して考えることにあります。LAP は、リベラルアーツを基礎教育では

なく、学部から大学院までの一貫した学問の在り方として確立していくことを目指しています。その一環として、東京大学のリベラルアーツを国際的に発信し、国境を越えた教育実践と、そこで得られたフィードバックをもとに、国際的な視野と基準を持ったリベラルアーツを作り上げようとしています。

具体的には、多様な専門領域の研究者が、共通のテーマについて、それぞれの角度から論じるテーマ型講義を行っています。ひとつの問題を多面的に捉えることによって、専門領域の中だけでは発想されなかった新しい研究視角がもたらされ、受講者に、「どう考えていくのか」を提示していく講義となっています。LAP では、この講義を東京大学と南京大学の双方を循環させて行い、国際的な視点からのフィードバックを得ています。このような講義を行うため、文理を問わず、与えられたテーマを考えるために必要な各研究領域から教員を招聘しており、「文理融合」は、プロジェクトのキー概念のひとつとなっています。

LAP ではまた、リベラルアーツの国際的発信とあわせた学生交流を実施しています。これは国境を越えて他国の学生と接し、多様な価値観や社会背景の中で自分の考えを見直し、相手の立場を尊重しながら議論をする教育実践です。同時に、学問としてのリベラルアーツを刷新し、その成果を次の教育に反映させることで、21 世紀を担う若者たちを養成していきます。

参加学生に考えて欲しいこと

LAP の学生交流は、学部 1 年生から大学院生までをひとつのチームとして国外の大学へ派遣しています。知識の量ではなく「どう考えるか」を学ぶために、東大の件でも普段は交流のない学年や専門の学生を集め、専門知識によらない議論や交流を行って欲しいと考えているためです。参加学生の皆さんは、日常とは異なる環境のもと、考え方の異なる相手と議論する中で、相手の立場を尊重しながら議論するにはどうしたらいいのかを、考えてもらいたいと思っています。同時に、日本人として当たり前だと思っていた自分の立場や考え方が如何に危ういものであるかを感じ取ってもらいたいと思います。

LAP の講義は、各教員が、専門外の新しいテーマについて自ら考え構成しています。受講学生の皆さんには、受け身の姿勢で受講するのではなく、最先端の研究者たちがどのような思考のルートを辿って講義を組み立てているのかを、積極的に読み取り各自が考えるための基礎を作ってもらいたいと思います。自らの考えを組み立てていくことは、簡単なことではありませんが、LAP のプロジェクトに参加することを通して、少しでもそのきっかけを掴んでもらえれば幸いです。

LAP は、既存の知識を疑い、自分の思考を絶えず刷新していく積極的な学生の参加を期待しています。

プログラム構造図 (南京モデル)

本報告集は、東京大学リベラルアーツ・プログラム（LAP、以下 LAP と略）が 2011 年度に行った 2 回の学生交流の内容紹介、および参加者の感想・レポートから構成されています。LAP の教育プログラムは通常の学期を単位とした授業とは異なり、1 テーマ 1 年間を基本サイクルとしています。12 月に東京大学で行われるプレ講演に始まり、3 月に南京大学で開催される集中講義、そして 10 月から東京大学で行われるテーマ講義、というサイクルです。また 1 サイクルにつき南京大学と東京大学で各 1 回、学生交流を実施しています。

以下「リベラルアーツ、古都へ」(4 頁)では、南京大で開催された南京大学集中講義学生交流の内容を、「リベラルアーツを体験・実践する」(12 頁)では、東大で開催された東京大学一週間体験プログラムを、また「東京大学と南京大学の交流 10 年目を迎えて」(42 頁)では、2011 年度に東京大学と南京大学の交流 10 周年を記念する目的で開催された「南京大学 DAY in 東京大学」の内容を紹介しています。

南京大学集中講義 (3 月)

3 月の 1 ヶ月間、南京大学へ東大教員を派遣して集中講義を行います。日本人にも中国人にも身近なテーマについて、文理融合の最先端の研究成果を用いて論じることで、問題を如何に発見し、如何に思考するのかを、学生の皆さんに伝えていきます。講義には両大学の学生が参加し、議論を行います。



本報告集内容の範囲



学生交流

A. 東大から南京大へ (南京大学集中講義学生交流)

南京集中講義の期間中、東京大学と南京大学の学生が、共に同じ講義を受講し、受講後にそれをテーマに討論を行います。東大から南京へ派遣された学生、学部 1 年生から大学院生まで、文系・理系を問わない混成グループです。身近なテーマをめぐる討論は、日中間の異文化体験から専門や学年を越えた交流へ進み、様々な自己発見をもたらします。

B. 南京大から東大へ (東京大学一週間体験プログラム)

南京大学の学生を東京大学へ迎え、教養学部の議論と学生生活を、そっくり体験する短期プログラムを実施します。教養学部の「日常」を開放し、参加学生による研究発表や討論を行う。日常体験型の交流を目指しています。

プレ講演 (12 月・1 月)

本講演は、南京大学で行われる南京大学集中講義のプレイベントです。テレビ会議システムを用いて南京大学へ中継し、東京大と南京大で同時に開催致します。3 月の集中講義テーマの中から、核となる文理の講義を選んでそれぞれを論じ、それを東京大と南京大の学生の皆さんに共に考え、議論してもらいたいと考えています。講演に参加し、レポートを提出した東大学生の中から、3 月の集中講義への派遣者を選抜します。東大学生であれば文系、理系、学部生、大学院生を問わず参加可能で、多様な層の学生を派遣することで、東大学生の中での交流も深めたいと考えています。

テーマ講義 (E-lecture, 10 月～1 月)

プレ講演、集中講義と同じテーマについて、東京大学でリレー講義を行います。南京大学集中講義での成果を反映させ、これまでの東大での講義を刷新し、刺激的な講義を行うことを目指します。講義はテレビ会議システムを通じて南京大学へも中継します。テーマ講義での成果は、次の年の南京集中講義に反映させていただきます。

南京大学集中講義学生交流

リベラルアーツ、 古都へ

東大生が南大へ

毎年3月の1ヶ月間、南京大学で行う東京大学集中講義へ東大学生を派遣。両国の学生が同じ講義を受け、ひとつのテーマについて、議論をします。東大から南京へ派遣される学生は、学部1年生から大学院生まで、文系・理系を問わない混成グループです。最先端のテーマをめぐる討論は、日中の異文化体験から専門や学年を越えた交流へ進み、さまざまな驚きと自己発見をもたらします。

概要

2011 年度に南京大学で実施する学生交流は、集中講義「記憶と記録」に合わせて、3 月 6 日から 27 日の期間、東京大学の大学院生、学部生合計 23 名を 3 グループに分けて派遣する計画だった。だが周知の通り、3 月 11 日の午後、宮城県牡鹿半島東南東沖マグニチュード 9.0、最大震度 7、日本観測史上最大規模の地震が発生した。その直後、東北地方の沿岸部は津波に襲われ壊滅的な被害がもたらされた。こうした状況の中、本プロジェクトの第 1、第 2 グループに参加した東京大学生は予定通り南京行きを執行したものの、当時震災の全体像はまだ明らかになっておらず、学生たちは不安な気持ちを抱きながら授業を受け、学生交流を行ったのであった。震災の影響により第 3 グループの派遣は中止された。

学生交流の内容

下の表は集中講義のスケジュールである。毎週月、火、木、金曜日、東大からの派遣学生は午前中は南京大学の学生と共に集中講義を受講し（授業内容は集中講義「記憶と記録」講義録〔◎頁〕を参照）、午後は南京大学日本語学科の学生との自由討論を行った。今年度の新たな試みとして、授業と学生討論のティーチングアシスタント（以下 TA）を導入した。計 5 名の TA は担当教員の推薦により選ばれ、講義の記録、学生討論の司会進行役を担当した。学生討論のテーマは各日異なっており、例えば午前の講義がやや難解であった場合、午後には学生たちは講義の内容を整理・確認した。また刺激的な議題が生み出された場合、学生たちはその議題について討論するなど、状況に合わせたフレキシブルな形態を採用した。そしてそれぞれの研究内容と「記憶と記録」との関わりについても知見を交換した。これらの討論は日本語で行ったため、南大生にとっては不自由があるのではないかという不安もあったが、実際に討論してみると南大生の語学力は非常に高く、時には東大生より日本の歴史や社会事情に造詣が深いと

いうこともあった。

学生討論の後、南大生が東大生に南京大学の周辺環境を紹介したり、食事に連れて行くなどの個人間での交流も活発であった。また休講日には、南大生が南京市内の名勝、例えば明孝陵、中山陵、中華門や玄武湖などの場所を案内した。南大生の親切なアテンドにより、東大生はたとえ中国語を全く解しなくとも南京を満喫することができ、実際に南京に行ってみるまで想像のできなかった、中国の一側面を見ることができた。

「南京大学集中講義学生交流_参加者の声」（6～11 頁）に参加者の感想を記録しているので参照されたい。

海外での学生交流のねらい

「外」の土地と人間は私たちに、普段の生活で得ることの出来ない、様々な経験を与えてくれる。ただしその貴重な経験を、単に既存の知識を再確認するだけにしないためには、五感をより研ぎ澄まし、「何か違う」、「何か変だ」という事を感じ取り、その意味を丁寧に考える必要がある。LAP の学生交流はこうした機会を提供するため、学生の討論と、教室外での様々な体験の双方を重視している。自分とは違う社会背景と教育システムで育てられた学生と一つのテーマについて話し合うことにより、相手の持っている文化に対する理解を深めることができ、これまでにない視点に気づき、それを生み出すきっかけとなる。また、社会の情報化・バーチャル化が急速に進む現在こそ、リアルな空間でその場所の空気を吸い、ものを食し、人々と触れあう経験が重要であると考えている。参加者にはこのようなプログラムを通してこれまでの自分が抱いてきた既成概念を疑い、柔軟な思考を獲得し、また東京では得ることの出来ない体験から自身の世界観を広げていくことを望んでいる。「外」が全く自身と無関係・無関心な「よそ」ではなく、自身との感情的な結びつきをもった「対等な他者」となってくれば望外の喜びである。

第 1 グループ（2011 年 3 月 6 日～2011 年 3 月 13 日）

	3 月 6 日（日）	3 月 7 日（月）	3 月 8 日（火）	3 月 9 日（水）	3 月 10 日（木）	3 月 11 日（金）	3 月 12 日（土）	3 月 13 日（日）
09:00～12:00	第 1 グループ 南京に到着	講義受講 渡邊正男 「中世史料からみる記憶と記録」1	講義受講 渡邊正男 「中世史料からみる記憶と記録」2	市内見学	講義受講 廣瀬通孝 「情報技術と時間感覚」1	講義受講 廣瀬通孝 「情報技術と時間感覚」2	市内見学	第 1 グループ 日本へ帰国
14:00～16:00		学生討論	学生討論		学生討論	学生討論		

第 2 グループ（2011 年 3 月 13 日～2011 年 3 月 20 日）

	3 月 13 日（日）	3 月 14 日（月）	3 月 15 日（火）	3 月 16 日（水）	3 月 17 日（木）	3 月 18 日（金）	3 月 19 日（土）	3 月 20 日（日）
09:00～12:00	第 2 グループ 南京に到着	講義受講 渡邊雄一郎 「植物が示してくれる記憶、記録」1	講義受講 渡邊雄一郎 「植物が示してくれる記憶、記録」2	市内見学	講義受講 酒井 邦嘉 「脳から見た人間の言語の記憶と記録」1	講義受講 酒井 邦嘉 「脳から見た人間の言語の記憶と記録」2	市内見学	第 2 グループ 日本へ帰国
14:00～16:00		学生討論	学生討論		学生討論	学生討論		

参加者の声

南京大学学生

講義での質疑の時も、交流会の討論でも、いつも「さすが東大の学生さんだなあ」と感心した。講義の内容に関して、東大の学生がそれぞれ自分なりの意見を持っている。とても独特の発想と深みのある見解もしばしばだ。日本人ははっきり自分の意見を言わないと言われてきたが、東大の学生たちにはこういう「日本人の特徴」があまり見えなかった。そして、東大の学生のなか、中国の古今の小説をたくさん読んだ人がいた。中国の小説（文化）が好きになってくれることに嬉しく思ったと同時に、自分が彼ほど中国の小説に詳しくないことにとても恥ずかしい感じをした。今回の交流を通じて、お互いに理解を深めた一方、日本の学生たちからたくさん教わった。本当に勉強になった。

日本語科院生1年 韓秋燕

東大の学生さん及び先生との多くの直接交流もとても貴重な経験だった。3月8日「中世資料から読み取る記録と記憶」で同時通訳を担当したおかげで、東大の学生さんと先生方々と一緒に昼ごはんを食べるチャンスをいただき、その時の「小籠包」の食べ方にまつわるエピソードはその面白さで今でも覚えている。ほかにもいろいろあるが、このような「記憶」は、双方の学生と先生の相互理解を深めてきた。数多くの交流時間のおかげで東大の学生さんと友達になること、また身近に先生方々の魅力を感じることができるのは、本当にうれしかった。もしこれから講義のない午後と夜に定期的に「交流会」と「自由活動時間」を設置し、たとえば月・水は「交流会」で、特定のテーマや本について討論する形をとり（事前に指定するほうがいい）、ほかの日は見学・観光・招待宴など多様な形で一緒に遊んだら（東大の先生方々及び学生さんがあらかじめ行先を指定し、スケジュール記入するほうがよりいいと思うが）、より系統的で効率的な交流が行われると信じている。

沈清清

講義を受ける当日の午後、学生交流があった。形式が多様で、内容も豊富で、充実でおもしろかった。日本人の学生たちはとてもまじめで、私たちと一緒に講義について討論したとき、よく発言して、活発であった。今でも覚えている、どこへいっても本を持ってきているほど読書が好きで、博覧強記の津田さん、思いやりもユーモアもある余さん、あまりしゃべらないが、やさしい前原さん、……、懐かしい思い出ばかりであった。チャンスがあれば、ぜひみんなとまた一緒に会いたいのである。それから、もっとこのような多種多様な交流に参加したいと思う。

胡慧蓉

東京大学の学生たちは積極的に討論会に参加し、発言し、活発ですね。そして、その発言には、時々鋭い見方を提出し、ノートを記録し、実に真面目な学生です。授業や討論会のほか、私たちは友達になって、南京市のあちこちを見物して、とても楽しかった。東京大学の友達から、私がまなぶべきところはたくさんあると思います。

ただし、討論会には、日本側は様々な専門の学生が出席することに対して、中国側は日本語専門だけが参加した。ほかの専門の学生は言語のレベルが原因で、参加できません。中国側の学生たちは皆日本語で発言し、本番のディスカッションで日本側の学生たちに負けるかもしれませんね。

外国語学院院生1年生 宋万



私は何回も交流会に参加した。交流会は単に親睦を深めるだけでなく、授業の内容を確認したり、分からないところと一緒に議論したり、また授業の内容を補足したりして、とても有意義だったと思う。しかし東京大学の学生たちはとても活発だったが、南京大学の方はあまり発言しなかった。その理由を考えてみたら、やはり私たち南京の日本語学科の方は全員文系だったので、理系の授業の内容が理解できないところがあったからである。それに、自分の日本語に自信がなさうだ。だから、私たちは自分の知識面と視野を広める必要があり、今度もって活発的で積極的な姿勢を見せなければならない。

空港への送迎から、市内観光、宴会まで、東京大学の学生たちと交流する機会がとても多かった。東京大学の学生は優しく、熱心である。みんな、一緒に、生活、勉強、文化などについて、いろいろなことを話し合っ、私の日本語の会話能力を高めた。このプロジェクトは日中両方の学生の交流を促し、お互いに理解を深めることができると思う。

日本語学科修士1年生 陳玉

中国の学生は問題を分析するとき、難しくするような傾向がある。もちろん私もそうだ。それに対して日本の学生は、いつも難しいことを簡単に解決する。例えば、「意味論」と「統語論」を説明するとき、杉谷さんは簡単な例を挙げて説明した。「これは熱い水だ。」「これは熱いお湯だ。」この二文は「統合論」から見れば、「主語は連体修飾語＋体言＋だ。」からなるので、正しい。しかし、「意味論」からすれば、前文は無意味で正しくない。簡単で理解しやすい。日本人は実用的で、中国人は形而上的であることを証明したのではないかと考えた。これから、私はぜひ問題を実用的に解決するよう。

私はまだ一度も日本に行ったがない。同じ年頃の日本の学生君は、普段何事に関心を持っているか分らなかった。彼らと深く交流したかったが、共通の話が少なかったから、なかなかうまく行っていなかったそう。この交流を通じて、自分の知識の狭さが気づいた。今、私は日本のレクリエーションとか、人気漫画等に関心を寄せている。来年、いいコミュニケーションができるように。

修士一年 劉義翠

講義を受けるだけではなく、学生間の交流も今度の交流活動の重要な内容であった。幸いなことに、私は去年の11月にLAPプログラムの交流学生として一度東京大学に行ったことがあるので、今度南京大学へいらした学生さんの中に何名かの知っている人がいる。今度の交流活動は私に杉谷さん、若沢さん、余さん、近藤さん、古賀さん、森さんともう一度会う機会を与えてくれた上に、新しい友達を作るチャンスをもたしらしてくれた。いらした学生さんの専門は様々なので、皆一緒に講義を受けて、講義の内容をめぐって討論して、もともと理解しにくいことが分かってきて、勉強になったところはいっぱいあったのである。悔しいことに、私は三月の時に発表の準備とバイトに忙しかつたので、東京大学の学生さんを伴った時間が少なく、行き届かないところもいっぱいあって、ここで申し訳ないと言いたいのである。

集中講義と学生交流は私たち南京大学の学生にとって、見聞を広げる機会であり、専門研究の面から言えば、研究方法などを勉強するまたとない機会でもある。こんな活動はこれから毎年続けていいなあと心から期待している。

日本語学科修士1年生 蔡菁

それぞれの講義の後、各2回、計4回の学生討論をおこなったが、最初に述べた交流に対する積極的な姿勢は、初日から実感していた。特に初回は、ほとんどの学生が初対面であったにもかかわらず、自己紹介および講義内容の簡潔な復習の後、きっかけとなる話題を見付けてはお互いに話を進めようとする意識を垣間見ることができたように思う。初回はディスカッションと言えるような内容までは到達できなかったが、特に南京大学の学生は親しみの少ない日本の中世史について質問をおこない、講義内容を理解しようとしていた。また、個人の体験を例に出して記憶と記録が作り出す性別や国籍に関するアイデンティティについてまで話が膨らむなどして、討論予定時間を過ぎて話が続いていたことには感嘆した。2日目以降は講義内容だけでなく、東大の学生が主に学んでいる研究内容も引き合いに出しながら、記憶と記録に関して思いつくままにそれぞれが意見を述べ、少々話が拡散しながらお互いの知見を交換しながら、双方の学生がお互いを知り、交流・理解を深めようとする意識が感じられた。後半の講義後の討論は私が全体のファシリテータを務めさせていただくことになり、この時は廣瀬先生が講義の最初で触れた意味論と統語論がディスカッションの中心となった。また、バーチャリアリティ技術の目的や、開発しているシステムについてある程度説明した後、それらの技術が完成したときに人間の記憶や人間そのものに起こりうると予想される事象について話し合った。私を除く学生は全員文科系であったが、人間の行動や記憶を全て保存するライフログ技術と、技術が過去だけでなく未来も現在に凝縮しているという話題は特に関心が深かった様子で、なぜ全ての体験を記録するのかということについて、さまざまな議論がおこなわれた。最終的にそれらの技術が生み出す事象について、研究室で得られる考え方とも異なる意見が何度も飛び出し、私自身の研究に対する考え方に新しい着眼点を作ってもらったような気がした。

討論全体について感じたのは、交流と討論に対する学生ごとの違いである。討論には平均約15人ほどの学生が参加していたが、学生討論において講義内容について深く掘り下げたい学生と、学生と話し合いそのものをしたい学生の2パターンが同席していたように感じられ、一度話が拡散するとまとめきれなかったり、中で2、3のグループに別れてしまうこともあった。一方で、全員が全員と話し、関わろうとする意識がひしひしと感じられ、専門も背景も異なる学生だけでこのような議論をおこなうことができるのかと目から鱗が落ちるような思いであった。

このような討論などを4回通して、派遣最終日に我々は南京大学の学生から南京市内を案内していただいた。この日は皆打ち解けた雰囲気、南京市内の観光スポットや有名建築物およびエリアの歴史、あるいは南京および中国全体の食べ物について説明していただいたり、あるいは南京における若者の流行やショッピングについて和気藹々と話をすることができた。1週間前にはプログラム参加の学生としっかり関わることも不安であったが、最終的にこれほど仲良くなれたことは、非常に喜ばしいことであった。

工学系研究科先端学際工学専攻 櫻井 翔

予期せず学んだこともいくつかあります。

まずは中国の制度や中国人の感覚・思想です。ディスカッションや休みの日の交流を通して話をする中で、中国人の考え方を色々と聞くことができ、少しでも中国に対する理解は深まりました。また実際に町を歩くことで、共産主義を名ばかり化した結果パブルが起き、高層ビルの隣で野菜売りの行商人が夜な夜な店を構えるような、格差社会の中国を見ることができました。

そして、日本、とりわけ東大の教養教育の意味も部分的ながら理解することができました。確かに中国の学生は量の面でも、また能力の面でも日本の学生を凌駕しているという印象を受けました。しかし、いろいろな考え方を柔軟に学びとり、実用場面で選択し使用するというプロセスは日本学生の方がたけていると感じました。その点で、日本の良さや、「考え方を学ぶ」という教養教育の重要性を感じました。

また、ディスカッションは非常に面白い試みだったと思います。

しかし、議論の方法についてすでに学んでいるものがなかったため中々うまく議論できないところがありもどかしかったです。テーマに関してもお互いの意見を引き出し、内容を深めることの難しさを実感しました。学籍上は全員基礎演習で議論の方法を学んでいるはず、ということですが、実際基礎演習の授業ではしっかりとした指導が行われていないことが多く、議論の方法を学ぶ機会があったらぜひ参加したくまたこのプログラムに参加する人はある程度の方法の習得が必要なのではないかと思います。ただ未熟な議論の中でも得るものは多かったです。

文科三類2年 前原 一輝

今回日本語が話せる中国の学生さんと交流するという貴重な体験が出来て、本当に良かったと思っています。言語が異なる方と交流するには、ある程度の勉強が必要です。しかし、今回は全く中国語が話せない私でも交流することができ、アジアの新しい価値観を知る事が出来ました。特に嬉しかったのが、範麗香さんという同じ修士1年生の女性と仲良くなり、日本に帰ってからも交流を続けられた事です。学校を通してではなく、学生同士の関係からもっともお互いを知ることが出来ることは非常に有意義だと思います。そして友達が増えることはなかなか出来ることではなく、このような機会に恵まれて本当に感謝しています。彼女を含め南京大学の学生さん達が日本に来るときには、出来る限り歓迎したいです。

大学での交流を通して一番感じたことは、南京の学生さん達が日本や日本人に対してとても興味を持ってくれているということです。私は集中講義に参加する前に、南京大虐殺に関する記述がある本を読みました。その本から日本と南京とで現実認識の違いがあり、南京では私達が想像しているよりも酷い歴史として理解されている事を知りました。だからこそ、南京の学生さん達は日本人に対して良い印象がないのではないかと覚悟をしていたのですが、そんな思いとは裏腹にとっても親切に接して下さり、なんと授業後に観光にも連れて行ってくれました。授業で話題になった梅が沢山咲いている山、総統府や中山陵園、お寺などが特に印象に残っています。建物や装飾などが日本とは異なっており、美に対する感覚の違いを感じました。また観光地に付随した中国の歴史を学生さん達が説明してくれたので、中国語の解らない私も理解が出来ました。

私は、南京大学の学生さんが「何故日本語を学んでいるのか？」という疑問を、南京大虐殺の本を読んでからずっと持っていました。そこで討論会で思い切って質問したところ、7人ほどから回答を得ることができ、大きく分けて2つの意見が出ました。1つ目は、日本と中国の国際交流は今後もっと活発になっていくから、日本語が必要だと思ったという理由。そして2つ目は、日本の文化、最近はどこにアニメが好きだからということでした。日本語を学び始めたきっかけというのは、私が考えていたよりもずっとささいなことだったのがとても意外でした。にもかかわらず、彼らは皆日本語が達者で日本語の教師や通訳の仕事をしている方も多く、熱心に勉強していることを知ったのです。このようにしてどんどん日本と中国の交流が盛んになって行くのはとても嬉しいと思いますし、難しい知識がなくても互いに話せる共通の話題があることは、楽しいと思います。アニメは私達には当たり前で、学校で教わるような真面目なものではないけれど、普段の生活の娯楽にもなっているものから交流が始まるのはとても面白いです。私達の意識していないところで日本に興味を持ってくれる人が増え、それによって交流が盛んになることを知り、もっともっと積極的に今の日本の文化を広めていきたいと思いました。おそらく、日本のアニメや文化を知らない海外の方は沢山いると思います。日本から積極的に情報を発信することで、思いもよらないところから交流が生まれるのではないかと考えました。

しかし情報だけではなく、直接の関わり合いもとても大事だと思います。私は中国語を話せないし、中国の人と関わったことはほとんどありませんでした。だから彼らが日本をどのように考えており、どのような文化を持っているのかもほとんど知りませんでした。しかし互いに接することで、言葉だけでは伝わらない好意も感じましたし、言葉が使えない私でもジェスチャーや表情で好意を示すことが出来たと思っているからです。そしてもっともお互いを知りたいと思ったし、中国語も学んでみたいと思いました。話せなくても、せめて彼らが何を言っているかぐらいは理解できるようになりたいと思ったのです。以前の歴史にとらわれてしまうより、現状を把握して積極的に行動することを心がけている人々がいることは、私達日本人にとっても印象が良く、お互い良い関係を形成していける土台になっていくと思います。

ただ、町中を歩いていると、国民性は日本とはかなり違うということを感じました。南京大学の学生さん達は、中国の中では特別な存在かもしれません。控えめな日本人と比べて、中国の方はとても自己主張が強い印象を受けたのです。交通がとても乱雑で、並ばずに平気で割り込んできたり、どこか無愛想だったり、親切だと感じる事がとても少なかったからです。南京大学の学生さんたちはとても気を使ってくれたので、非常にギャップを感じました。このままの国民性をぶつけられたら、交流をするときにはマイナスになってしまうのではないかと思います。私はその壁を乗り越えるのに、互いの文化を知る事は最低限必要だと感じました。

私は今回の経験から、海外の方と交流するときにとっても大事なことは互いの良さを感じ、それを認め合えるように努力すること、そしてちょっと勇気を持って積極的にぶつかることだということを学びました。そして一度自分の障壁を乗り越えれば、知らなかった世界を知る事ができ自分も成長していけます。日本人は消極的だと言われるので、もっとこのような機会を作り、世界に出て行って欲しいと思いました。日本を知りたいと思っている海外の方は沢山いるかもしれません。そしてこちらからも情報を発信していけば、日本に興味を持ってくれる方が増えると思います。

総合文化研究科広域科学専攻修士1年 橋場彩有里

講義以外の時間は、南京大の学生さんが南京市内の観光スポットを案内して下さったり、食事に連れて行って下さりました。私たちは中山陵や総統府に連れて行って頂き、中国人の孫文に対して抱いている感情や、政治に対する考え方についても教えて頂く事が出来ました。

このように中国の方に案内して頂けると、観光するだけでは分からない価値観や文化的な背景などを知ることが出来て大変勉強になりました。ただ、歴史的な背景などについて全く分からないという南京大の学生さんもありました。これは私たちが案内する側に立った時にも気をつけるべき事ですが、外国の方を案内する際には自分の国の歴史について少しでも勉強しておくべきなのだという事に気づきました。

また、勉強に関することだけでなく、普段の生活についてや人生観、恋愛観など色々なことについて話す事が出来ました。その中でも印象に残ったのが、就職についてのお話で、中国は現在経済が発展しているように見えるのですが、実際それは一部だけの事で、就職も厳しい状態だということでした。また、給料の高い職業は公務員でそれになる為に難しい試験があるという事、一人っ子政策のために晩婚化が進んでいることなども教えて頂きました。貧富の偏りがある、農村では食べて行く事すらままならない人がいる、と言う事は私も知っていたのですが、驚いた事は、中国国民がそれを受けて国家主席に対して不満や反感を持っていないという事でした。日本では、景気が悪くなるとすぐに首相を批判する傾向がありますが、南京大の学生さんに聞いたところ、中国国民は国家主席が大好きなのだそうです。

南京に対して日本が以前行った残酷な事件をうけて、南京の人たちは日本に対して反感を持っているのかと質問したところ、お年寄りの中にはそのように考える人はいるけれどもこれからは友好的な関係を築いて行くべきだと言って下さりました。実際に、街中で私たちが日本人だと分かると、若い方は今回の地震について励まして下さりました。反対に年輩の方は、南京大虐殺について君たちは知っているのか、と聞いてきた方もいらっしゃいました。

総合文化研究科修士2年 大屋愛実

月曜日の夜に彼らが開いてくださった食事会については忘れることができませんし、水曜日の午後には中山陵への道を共にすることができました。更には、金曜日の夜に東京大学の学生からのお返しとして開かれた食事会には、本プログラムに関わりになられた多くの方が参加して下さったこと嬉しく思います。最終日である土曜日には、南京博物院と夫子廟を巡る長丁場の観光行程にも付き合ってくださいました。

それらの交流を通して、南京大学の学生を気軽に会話を交わせる存在として身近に感じましたが、時には異なる文化的背景に依って立つ存在として遠くを感じることもありました。何と言っても、私にとって中国語は第二外国語ではなく、初歩的な会話集によって得られた浅薄な知識があるのみで、中国語で交わされる会話については接近することが困難でした。これについては、自身の勉強不足に帰属されるべき問題でしょう。

ただ、時折覚えたささやかな疎遠感は、言語能力のみに帰属できる問題でないと思います。当時は異文化で暮らすことへの心理的な緊張や、自身の体力の不足などもあり、あらゆる状況において納得の出来る行動ができたわけではありません。南京大学の学生に対して何が出来るのだろうか、と自身の立ち位置について思い悩むこともありました。しかし、今になって振り返ってみると、それらの葛藤の経験を含めて、得られたものは自分自身にとって血肉となり糧となったと思います。実際に、異文化という場に自らの足で立って、現地の学生たちと交流するという事の難しさと、それだからこそ通い合ったときに感じられる嬉しさを身を持って体験することができました。

学際情報学府学際情報学専攻 社会情報学コース修士1年 堀江郁智

交流には主として二つのあり方があった。第一に、質疑応答というあり方、第二に、休憩時間でのわずかな学生間のやり取りというあり方。後者は、講義内容とは直接関係のないものである。しかし、中継の面白さという点が学生間の交流（カメラ越しに呼びかけ合ったり、手を振り合ったりしていた）を活発化させたようである。

前者に関しては、私が参加した25日では、残念ながら中国側が一人、日本側も一人であり、学生同士の意見交換は実現できず、先生への質問のみであった。

質問することが難しくなる原因の一つとして、遠隔講義の場合、時間の制限が、通常の講義よりも厳しくなることが挙げられる。授業中は無論のこと、授業の後に先生に直接に語りかけたり、日中の学生間で意見交換をする機会は、なおさら持つことができない。そのため、目の前にいる人への語りかけではなく、むしろ先生への質問、ないし一方通行的な独白にどうしてもなってしまうようである。今後、遠隔講義がなされるようであるならば、討論の時間を別に設け、学生を上手く討論へと導く方法が必要になるだろう。やはり、遠隔講義という形式上、講義内容をめぐる学生間の直接的な交流は実現できなかった。しかし、いわゆる戦争犯罪の記憶に関する問題点、およびこれを扱った思想を、両国の学生が共有できたことは意義深いと私は考える。

表象文化論分野博士課程 飯田賢穂

これまで数回しか中国を訪れたことがなかったり一度も訪れたことのなかったりした周りの東大生とは異なり、両親が中国出身である僕は今回の集中講義・学生交流以前にも中国に行ったことがあった。だから、都市や時期の違いはあれ、僕にとって南京の街並みや雰囲気はそれほど珍しいものではなかった。すすけた空気やしわぐちゃのお札に対しても、中国にいるのだからこれは当たり前だと感じていた。

しかし、今回の南京訪問は、両親に依存しきっていたこれまでの中国旅行とは違い、自分自身でやりくりしなければならないことが多かった。といっても、あらゆる面で東大・南大の先生方や南京大日本語学科の学生、東大のTAの方々にお世話になり、これらの協力があったからこそ無事に、そして楽しくこの集中講義・学生交流を終えられた。けれども、このことを考慮しても、両親が全てを解決してくれた今までの中国滞在に比べれば、自分でその拙い中国語を用いて多くのことをした。それは店頭での商品購入・価格交渉やホテルでの衣類の洗濯の申し込みなど些細なことではあったが、僕の中では大きな進歩であったし、自分の中国語に対する自信にもなった。

帰国後、今までの中国訪問ではそれほど中国語を話せなかったのにも関わらず、なぜ今回はこれほどにも話せたのだろうと考えた。大学で一年間中国語を学んだことや話さざるを得ない状況であったことも確かにその要因の一つや二つであるが、滞在中常に日本人に囲まれていたということがその主たる理由ではないかと僕は考えている。両親と共にした中国滞在中では、ずっと親戚などの中国人に囲まれていた。親戚などの両親と親しい人たちは僕が中国語をあまり話せないことを理解していたが、それでもある程度は話せるだろうと思っていることが感じ取れたし、そうでない街中の普通の人々は、中国人に囲まれているゆえに僕に流暢な中国語を期待した。大きくなってジャパニーズスマイルを覚えてからはこの状態にあまり苦は感じなくなったが、小さい頃には恥ずかしさや引け目を感じていたに違いない。そのため、これまでは中国語を話さなかったのではないかと。一方、今回の南京滞在中では常に日本人と行動したので、滞在中に会った現地の人々は自分のことも日本人だとみなしてくれたために、下手な中国語でもたくさん話すことができたのではないだろうか。

余晟海

この前の秋に東京に南京大生が来た時から感じてはいたのですが、日本語に関してはとても流暢でした。あまりにも日本語がうまかったので、僕たちはこんな中国語のレベルでやってきていいのだろうかと不安になるぐらいでした。訪れた場所が南京ということで、反日感情が強いと思っていたのですが別にそんなことはなく、あちらの学生さんたちは毎日のように僕たちをおいしい料理屋と観光名所に連れて行ってくれました。さらに南京大生だけではなく、現地の人々もかなり親日的だったと思います。トイレトペーパーをホテルのロビーにもらいに行ったら中国の方数名に友好的に話しかけられたり（残念ながら你是日本人！YEAH！）以外何を言っているのかわからなかったのですが、観光地のお店で日本人は友達だよって言ってもらえたり、過去の遺恨はほとんど消え去っているような気がしました。こういった話は第4週の高橋先生の授業で取り上げていた問題でもあり、もって考えてみて面白い問題だな、と感じました。韓国での現地人の反応はどういう感じなのか知ってみたい、と思います。

文系一類2年 近藤昭啓



東京大学一週間体験プログラム

リベラルアーツを 体験・実践する

南大生が東大へ

東京大学で行われる学生交流「東京大学一週間体験プログラム」では、南京大学の学生を東京大学へ迎え、教養学部の講義と学生生活を、そっくり体験する短期プログラムを実施します。教養学部の「日常」を開放し、参加学生による研究発表や討論を行います。これまでにない、「日常」を考える学生交流です。



概要

2011年の11月6日から11月13日にかけて「東京大学一週間体験プログラム」を実施した。併せて東京大学と南京大学の交流が始まって10周年となるのを記念し、プログラム期間中に「南京大学DAY in 東京大学」も同時開催し、昨年より多くの学生及び教員を招いて、東京大学駒場キャンパスで多彩な企画を行った。そのうち「東京大学一週間体験プログラム」では、授業体験と共同研究を実施した。

リベラルアーツ教育を体験する—授業体験

一般に、外国人学生を招いた短期交流プログラムでは、日本人学生が一般に受けている授業を外国人学生が体験するというプログラムはほとんどないのではないだろうか。これに対し、LAPでは昨年から「体験授業」を開始している。体験授業とは、LAPが受け入れた南大生が、日本滞在期間中、東京大学教養学部の授業を数コマ聴講することを指す。昨年度の体験授業は東大生が推薦した授業に1日1コマ以上出席するというプログラムであったが、今年度は刈間文俊先生・李道新先生「中国映画論」、原和也先生「精神分析学」、清水晶子先生「クイア理論入門」という教養学部3、4年生を対象とする講義を全員参加講義とした。南大生にとって、1学期13コマから構成される講義のうちの1コマだけを受講するのは、その講義の全体像の把握、及び授業内容に対する理解等の点で困難があることは確かだが、東京大学教養学部の特色ある講義を垣間見ることができるのは刺激的であろう。

リベラルアーツを实践する—共同研究

今年度「東京大学一週間体験プログラム」の試みは、教室で学んだリベラルアーツと知を創造する手法を实践する企画として、東大生と南大生の混成チームによる共同研究を実施した。共同研究は自ら問題を発見し、自らその解決ツールを作り出す、いわばリベ

ラルアーツを实践させる方法でもある。プログラムに参加する学生を4チームに編成し、「記憶と空間」という大テーマを与え、これについて各チームがより具体的な研究テーマを練り、実際に東京のまちでフィールド調査し、研究、発表してもらった。具体的にどのように研究テーマを解釈するか、研究対象はどこに設定するか、だれにインタビューするかは、すべて参加者が討論して決定した。

この共同研究の目的には、少人数で一つのプロジェクトを共同して造りあげていくことで、参加する東大生と南大生がより親密かつ濃厚に交流することを期待するということがある。またもう一つ重要な点として、南大生に、「まちで生活する一般的な日本人」と会話する機会を設けたいということがあった。そのため共同研究では、必ずフィールドに出てインタビューをするようにと予め規定した。各チームの研究内容については、参加者が執筆したレポート(16~33頁)を参照されたい。

肌で感じる東京

授業体験と共同研究以外に、南京大学の学生により東京大学と日本の文化を理解してもらうため、茶道体験と東大キャンパスの紹介を実施した。茶道体験は宗和流家元・宇田川宗光氏のご好意により、「一枝窓」という由緒のある茶室で、家元とお茶の文化について話し合いながら、抹茶と季節の和菓子を楽しんだ。一方キャンパス紹介では、本郷の総合図書館、情報理工学研究室の3D実験室、資料編纂所を見学した。また、東大生が南京を訪問した際に南大生がアテンドしてくれたように、南大生が東京滞在中には、東大生が南大生を渋谷、銀座、浅草、上野などの場所へと案内し、それぞれの場所で見聞したことについて意見を交換した。

このようなプログラムにより、南大生は、彼らがこれまで主にマスメディアから得てきたような情報とは異なる、リアルな東京を感じることはできたのではないだろうか。

	11月6日(日)	7日(月)	8日(火)	9日(水)	10日(木)	11日(金)	12日(土)	13日(日)
1限 9:00～10:30			共同研究作業時間(フィールド調査など)			共同研究作業時間(フィールド調査など)	都内見学	
2限 10:40～12:10	12:00(MU776) 成田着	10:00～ 特設講義 原和之 「リベラルアーツとは」 コラボ①		本郷図書館、情報理工3D体験、史料編纂所参観	授業体験2。 刈間文俊・李道新 「中国映画論」 理想的教育棟(21COMCEE) K401			
3限 13:00～14:30		茶道体験 チーム3、4 13:00 発 チーム1、2 15:00 発				特別講演3。 葉琳 「日中文学観の差異について」 コメンテーター：エリス俊子 コラボ②		13:00(MU775) 成田発
4限 14:40～16:10				授業体験1。 清水晶子 「クイア理論入門」 5号館517	授業体験3。 原和之 「精神分析学」 5号館511	共同研究成果発表 18号館コラボ③		
5限 16:20～17:50	学内案内、プログラム趣旨説明 9号館302会議室			テーマ講義 渡邊雄一郎 「記憶と記録」 情報教育棟4階遠隔講義室				
6限 18:00～19:30	18:00-20:00 レセプション 生協4階		特別講演1。 楊忠 「中国式管理の変遷と探索」 18号館ホール		特別講演2。 賀曉星 「中国における舞教育に関する考察」 コメンテーター：福島智 18号館ホール	懇談会(打ち上げ) 理想的教育棟アリーナ		

凡例

特別講演 体験授業 共同研究

東京大学の授業を受講して —参加者の感想

体験授業では、南大生は教養学部以下の3つの講義を受講した。

1. 中国映画論（刈間文俊先生、李道光先生・北京大学）

中国における大作映画と独立制作映画の現状について俯瞰する。また、中国、香港、台湾それぞれの映画に現される問題意識の違いについて語り、映画の分析を通してそれぞれの社会を読み解く。

2. 精神分析学（原和之先生）

フロイトとラカンを中心に、精神分析学の歴史および基本的な発想と概念を紹介する。精神分析学という事例の検討を通して、精神病理学的な事象が20世紀の人間をめぐる哲学思想に与えたインパクトを考えてゆく。

3. クィア理論入門（清水晶子先生）

クィア理論を可能にした理論的、社会的背景にはじまり、クィア理論の基本的な用語や概念を概観する。現在のクィア・スタディーズにおける諸議論を理解するための基礎を学ぶとともに、セクシュアリティについての議論に参加するために欠くことのできない基本姿勢を身につけることを、目的とする（シラバスより）。

以下は南大生による受講後の感想文。

東京大学で受けた刺激

南京大学日本語学科修士2年
範麗香

昨年11月に東京大学で一週間東大生と一緒に勉強することになって、いろんな講義を受けたことは、私にとってとても貴重な経験だったと思っている。

受けた講義の中で一番面白いと思ったのは刈間先生の「映画論」という講義だ。この授業はちょうど北京大学の李道光教授が東大ですることになっていたの、東大、北大、南大の皆さんが同じ教室に集まって、とても新鮮だった。

李教授の講義は「兩岸電影共同体」で、特に1979年以降の中国大陆と香港台湾の映画が発展していった状況について映画を見せながら解説するという形だった。今回の講義は時空概念の変換をめぐる、中国大陆及び香港台湾の共通している精神面と文化面を検討していた。

いくつかの古い映画を見せてくれた。例えば、『広島之恋』、『小花』、『孫中山』、『黄土地』、『紅高粱』等々。私たちがほとんどこれらの映画を見たことがないということに李教授はとても驚いたみたい。私も題名だけは聞いたことがあるが、映画自体は見たことがない。授業では断片しか見せてくれなかったけど、とても衝撃的だった。特に先生の解説を聞いたら、なるほどと思うことが多かった。とても勉強になったと思っている。映画って、いろんな角度から見たら、結構いろいろ違うことが見えてくるな。講義の最後、中国映画研究のベテラン刈間先生は李教授と違う意見があるため、お二人はその点について討論して、授業が盛り上がった。こういう討論こそ勉強に役に立つなと思った。どれが正しいかの問題じゃない、物事にはもともといろんな答えが存在すると思う。ただ、とても勉強

になったのは、これから物事に対して、たくさんの視点から考えなくては行けないということだ。むしろずっと正しいと思っていることこそ疑うべきじゃないかと考えた。

ほかに清水先生や原先生の講義にも出たが、こういった講義は専門用語が多く、関連知識も足りなかったため、なかなか理解するには難しかった。特に、外来語が多かった。今後もしまたこのような講義を開設するのなら、やっぱり前もって背景知識を勉強させたほうがいいと思う。授業自体はとても新鮮でそして世界のトップレベルの知識が勉強できて、私たちにとっては絶対将来の勉強の動力になると思っている。

東大と南京大の授業の異同と言っても、ほとんど日本語科の授業しか受けていないため、あまり言う立場ではないと思う。ただ、東大ではみんな自由にいろんな授業を受けることができるのはとてもいいことだと思う。中国の場合、大学に入ったら勝手に専門を決めることが圧倒的。だけど、これは多分よくないことだと今は考えている。高校時代は大学入試のために限られた科目を勉強するから、まだ自分のやりたいこととかははっきり分らない人が多いと思う。だから、東大みたいに一年生二年生は自分の興味ある授業に出て、いろんな授業を受けてから専門を決めるのがより適当だと思う。授業自体はそんなに変わらないと思うが、内容的には多少違うこともあるかもしれない。

東大で活発で新鮮な授業や研究を見られて、私もこういう学校生活を送りたいなって思ってしまった。東大の皆さんができることから、私にできないわけがないと思った。まだまだ力不足ということは分かっているけど、また頑張ってもっと上を目指したいと思っている。今度のプロジェクトはもしかして私の将来に関連する何かのきっかけではないかと思った。とにかく、とてもすばらしいプロジェクトだと信じている。

授業で感じたこと

南京大学日本語学科修士 3 年
徐海強

東京大学で奥深い授業を計四つ受講しましたが、残念ながら、記憶がぼんやりしてはつきり思い出せません。今考えてみれば、当時授業の内容を十分理解できなかったのは原因だと思います。とはいえ、当時清水先生がフーコーの説（政府・社会・性？）についての話に興味深く思って、フーコーの本を読もうと決心しました。総体的に言えば、私たち南大生にとって授業の内容が難しすぎました。受講する前に、授業の内容に関するレジュメをわざわざ配ってくれましたが、難しかったし、時間も短かったし、予習はとてできませんでした。東大生と同じように受講できる程度になるのにかなりの準備が必要だと信じます。南大生は授業の内容が分からなかったのが交流もうまくできなくなっていました。個人的な考えですが、今度は中国（社会、経済、文化などあらゆる方面）に関する授業に学生を参加させたらもっといいじゃないかと思います。実は、北京大学李先生と東京大学刈間先生の中国映画の合同授業が非常によかったと思います。当時受講した東大生・南大生の反応からすれば、みんな同じ感じをしたといえます。内容は特に難しくないだけでなく、中日の対照もできるので、交流の種になりました。

東京大学で学生が三年生になってから専門を決めることに驚きました。中国では一部の名門大学でその制度が導入されましたが、文学、歴史学、哲学など限られた学科において施行されました。南京大学も同じで、全学に及んでいません。東大生の専門の勉強が足りるかどうか心配しましたが、原先生が紹介したその制度の趣旨に大賛成です。つまり、自分の専門内で正しいことは常に正しいとは限りません。確かに、専門しすぎる傾向は危ないと思います。また、訪日する前に、日本では大学の勉強がほとんどゼミという形式で行なわれていると聞きましたが、今度受講した四つの講義は南京大学と同じ方式なのです。異なる点については、特に言いたいのは東京大学で先生は前に座っている授業中寝ている学生を無視したことです。南京大学では、そのような学生は普通先生に注意されます。本来は、寝たいと思っている学生は前に座りません。

今度東京大学で受けた授業、私にとって最も大きなメリットは自分の視野が広げられたということです。文化の相対性というものに深く感じました。これからの勉強も生活もこういう相対性を意識しながら、人と人は違うことを意識しながら歩んでいきたいと思っています。

最後ですが、日本では本当にお世話になりました。ありがとうございました。

視野を広げるように

南京大学日本語学科修士 2 年
唐菊芳

東京大学一週間体験プログラムに参加したとき、何種類の講義も受講した。ここでその中の一つ、刈間文俊先生と李道新先生の映画論、を代表として披露したい。講義は「中国映画史——大陸・台湾・香港の映画共同体」をテーマとして、1979 年から今までの、大陸・台湾・香港での映画史を紹介すると同時に、時空概念を中心として、その上記地域の映画の共通的な進行方向と文化内容も探求してくれた。講義全体としては、面白く感じさせるとともに、反省の余地をも与えてくれた。

個人にとっては、講義を受けてからも、先生の提示してくれた映画から映画と時空、時空と身分、身分と文化というそれぞれの関係を把握するのはやはり難題として残っている。おそらくこれは思惟に関する問題かもしれない。なぜなら、私は今まで映画を見るのはただそのストーリーなどから面白さを味わうためだからだ。論理的な思惟で文芸的な映画を思案するのは一度もなかった。これから映画を鑑賞するとき、映画で描かれている時代背景や所在地の文化の特徴などを思慮に入れながら理性的に見たほうがいいと思う。

授業の内容ややり方などをさておいて、何よりも私を驚かせたのは刈間先生の抜群的な通時通訳能力だった。李先生の速くて長い中国語の文を美しい日本語に同時通訳してくれたのに対して非常に敬服してならない。何年間も日本語を勉強している私たちにとってはやっぱりショックだった。これからもっともっと頑張らなければならないと認識させてくれた。

東京大学体験一週間で、ラッキーなことに、四コマの講義をアレンジしてくれた。生の授業ぶりを実体験できた。先生の自分の研究分野に対する愛と執着についてだ。刈間先生といい、渡辺先生といい、講義してくれた先生はみんな自分の専門の深くまで研究している。学者らしい風采を見せてくれて心から感心だ。そして、学生の勉強振りについてだ。

まだ教養学部一、二年生だといっても、当分の学習任務やこれからの進路などをはつきりと自覚している。それに、講義に積極的に参与して他人に拘らずそれぞれ自分の見解などを発表するなんて、私たちの手本になれると思う。

私はこれからできるだけ学問の道を続けていきたいと思っている。この度東京大学で体験して身に覚えていたいろいろを体の一部分にして、いつまでも大切にしたい。慎重でまじめに自分の好きな分野を繰り広げていきたい。そして、ほかの学科の理論や思惟方式なども学んで、広い視野に立って研究を行うほうがいいと考えている。

学生による共同研究「空間と記憶」



多文化交流の重要性が認識されて久しい。実際、各大学、各学部等で盛んに「学生交流」が実施されていることは論を俟たない。しかし、具体的にどのような交流を行うのか、また教育の一環として交流にどのような意味をもたすのかをきちんと議論し、「一度やってそれで終わり」といった形ではない、学生交流プログラムのあり方がきちんと考えられていることは少ないのではないだろうか。LAP では、リベラルアーツ普及、そして継続的交流という観点から学生交流の方法を考え続けてきた。昨年度実施した LAP の学生交流では、東大生が駒場の授業を案内し、最終週には相互討論を行うという新しい企画を実施したが、東大生からは「もっと議論がしたかった」との意見も多く寄せられた。当然のことだが、真剣に討論することを学生も望んでいるのである。しかし、適切な「場」を設けてあげなければ、その実現は難しい。学生どうしの「自由な交流」に対して、どこまで大学の教員やスタッフが手を出すのか、その塩梅は意外と難しい。LAP の企画会議で議論をした結果、今年度から研究員となった白佐立さんのアイデアで、「共同研究」を実施することにした。共同研究は学生たちに、高度な議論を通して、ここにしかない学生交流を体験させる方法であり、自ら問題を発見し、自らその解決ツールを作り出す、いわばリベラルアーツを实践させる方法でもある。少しハードルの高い内容ではあるが、実現のため目いっぱい努力する過程で、より交流が深まることが期待された。

共同研究では、事前の準備段階から博士課程を修了した間もない、LAP 若手スタッフが全面的にバックアップして学生の相談に乗り、テーマ設定や方法などを一緒に考えた。学生たちと討論を重ねたことで、これから研究や教育を担っていく若手スタッフもまた、様々な収穫を得ることとなっただろう。

研究テーマは集中講義のテーマ「記憶と記録」と関連づけ、「空間と記憶」と設定した。LAP は学生たちが集中講義

で習得した知識を共同研究の土台にして、その知識を応用し、さらに新たな知見を生み出すことを期待している。この抽象的なテーマ設定の他に学生に与えた条件は、実際に東京の街に出てインタビューを行う、ということのみであった。4つの班に東大生と南京大生を同数配分し、各班それぞれ具体的なテーマを決めて、共同研究に取り組んでもらった。学生たちはメールやMSNなどを利用して事前に相互に連絡を取り合い、準備を進めたようだ。こうしたプロセスを踏まえたことで、共同研究の前段階で東大生と南大生がお互いの意見をぶつけ合い、研究テーマに東大・南大双方の学生の視点を加えることが可能となった。

共同研究の条件としてインタビューを取り入れた理由は、日本語を勉強する南京大生たちが、大学での成果を実践的に運用する機会をもたせたい、そして街へ出て日本の「一般の人々」と触れ合うことが、よりリアルな日本理解につながるのではないかと考えたためである。実際のところ、多くの南京大生は「生身の」日本人と会話したことがなく、また東大生も、専門職や自分の生活圏以外にいる中国人と話したことがない。加えて、双方の学生には研究を共に行うことを通して、異なる社会・文化的背景を持つ相手にどう接触し、協力し合っていくかを考える機会としてもらうことを期待した。他者に配慮しつつ、協働して何かを生み出すことこそが、国際的な人材に必要な要素であるだろう。そして最終日には成果発表会を行った。教員も参加し、各発表の講評を行ったが、大変興味深いテーマと深い考察に驚いた人も少なくなかったようだ。各チームの独特の切り口からは、日中の学生が協働して行った成果であることが良く伝わってくる。議論も活発に行われ、記憶とはいったい何かについて、ひとつの形が浮かびあがってきたのではないか。この共同研究の経験を、今後の研究や仕事に活かしていってもらえれば幸いである。

コラム。茶事のミクロコスモスと茶道体験 宗和流・宇田川宗光



茶道は日本文化を代表するものの一つに挙げられ、「総合芸術」とも評されます。そもそも茶道とは、利休百首にもあるように、「客をもてなし茶をふるまうこと」に尽きますが、茶席の空間演出では、掛軸や茶碗等の美術品を配し、花を生け、料理を振舞い、茶を点てる中で、自分の美意識を演出し、客に伝えたい主題を提示します。また、客もただ受動的にもてなしを受けるのではなく、細心の注意を払って茶席の演出からこの主題を読み解き、亭主と客の相互のやりとりによって茶席の場を形成していきます。このように茶席の空間を亭主が演出し、また客が亭主の主題を読み解くには、書道や絵画、陶磁器、漆器等の美術品の知識や、和歌や古典文学の知識、花を生ける技術、日本料理の知識といった、様々な文化的な要素を必要としているので、「総合芸術」と呼ばれているのです。

また、茶席の演出には、文化的な知識だけでなく、亭主、客の経験や記憶も大きく影響します。同じ桜の絵を見ても、卒業式を思い浮かべる人もいれば、隅田川の川下りを思い出す人もいます。京都の掛軸の前に、徳利に桜の花を生ければ、昔亭主と客と一緒に京都で花見酒を楽しんだ、といった共通の経験を演出することができるかもしれません。きっと京都の思い出話に花が咲くことでしょう。次の席で出た美術品も、京都の花見を思い浮かべながら鑑賞されるでしょう。茶事の時間の流れの中で、空間演出をつなげていくことにより、個々の道具が意味のある文脈を持てきます。このような共通の記憶は、国や文化の違いを超えて、共通の認識を得る一つの鍵となります。

今回の茶道体験では、楊副学長をはじめとする南京大学の先生方や留学生をお招

きするとのことでしたので、茶道における中国と日本の美意識の違いを主題に考えました。中国から日本に茶が伝来して以後、禅僧の間で用いられていた茶は、やがて足利將軍家や大名の間に流行しました。書院の広間に中国から伝来した唐物の掛軸を掛け、唐物茶入や中国の天目茶碗を飾り、茶を楽しむ形式は「書院の茶」と呼ばれています。村田珠光の『心の文』での有名な一節「和漢の境をまぎらかす」に表わされるように、中国の美術品を取り入れて日本風にアレンジし、書院の茶として体系化されてきたのです。これに更に日本独自の美意識が入り、侘び茶と言われる「草庵の茶」が生まれてきました。完全な姿、シンメトリーな物を好む中国の美意識に対し、いわゆる「侘び」「寂び」と言われる美意識では、欠けたもの、不足した物の寂寥感に美しさを見いだします。

お客様には、まず「唐物」と呼ばれる中国の美術品を珍重した「書院の茶」の雰囲気の中で、簡単な懐石料理をお出ししました。床の掛軸には、古来から茶道の世界で珍重されており、また南京にも縁の深い白鷺の絵を選びました。続いて、茶庭の空間を通して、小さなニジリ口から小間の茶室に入って頂き、日本独自の美意識へと進化した「草庵の茶」の雰囲気で薄茶をお出ししました。狭い空間と広い空間、緊張と緩和をメリハリをつけて演出するのも、茶道の特徴の一つです。こうした、広間と小間のしつらえの中で、個々の道具の違いから中国と日本の美意識を体感して頂くとともに、中国の美術品で構成された日本の「書院の茶」における空間の雰囲気と、日本独自の「草庵の茶」の雰囲気を感じて頂きたいと考えました。

前述のとおり、茶席の中では、亭主と客がお互いに相手を気遣い、尊重して相手の意図を汲み取り、場の空気を作っていくことが大切です。茶席で用いられる禅語に「啐啄同時」という言葉があります。雛鳥が卵から孵るときに卵の中から殻をつつくの「啐」と言い、親鳥が外側から殻をつついて雛鳥を助けるのを「啄」と言います。この「啐」と「啄」がちょうど同じタイミングで同じ箇所をつついた時に、初めて卵が割れて雛鳥が産まれることができる、という意味の言葉です。茶道において亭主と客の間においてもこの絶妙なタイミングのやりとりができると、初めて良い茶席の空間が生まれます。

今回の茶道体験で、広間で懐石料理とお酒をお勧めした際に、楊副学長から「茶道の文化で、謝意を表すのにはどうしたらよいか」と尋ねられ、楊副学長の盃で日本酒を一献頂いたのが印象に残っています。茶道の文化を尊重し、理解しようとして下さっているのが伝わってきました。また、他の参加者の方からも様々な質問を頂き、茶道を理解しようという気持ちを感じられました。茶席の空間では将にこの、相手を尊重し、理解しようとする気持ちが、良い茶席の空間を作り出します。

日本人の中でも茶道を実際に体験したことのない人は多く、話で聞いたり本で読んだりしていても、実際に体験してみると想像していたのとは全然違った、という感想を耳にすることがあります。まして、文化や考え方の違う人の間ではその差異も大きく、言葉で理解するよりも、共通の体験をすることの意義は大きいと思います。今回の茶道体験に参加して下さいた方にとって、茶道体験の記憶が「日本」の概念を形成する一つのヒントとなることを願っています。

チーム 1. 有形な空間と無定型の空間における記憶



于寧（ウ ネイ）（執筆）
東京大学総合文化研究科 修士1年
今回の交流プログラムで、南京大学と東京大学の学生さんの間の架け橋になれば、なによりだと存じます。



河上友紀
東京大学教養学部2年、経済学部内定
中国語を学んでいます。（全然話せませんが。）まだ中国にはいったことはないですが、すごく興味があります。



柿沼優花
東京大学文科二類1年
日本のアニメ・漫画が大好きで、海外の方にその魅力を発信するためのマーケティング法などを勉強中です。



王香梅（オウ コウバイ）
南京大学日本語学科修士3年
専攻は日本近代文学、主に横光利一の文学作品についての論述。趣味は読書と旅行などである。



楊菲（ヨウ ヒ）
南京大学日本語学科4年
金融学にも興味があるので、今は第二の専門として勉強している。趣味は推理小説を読むこと、軽音楽を聴くことなど。



唐菊芳（トウ キクホウ）
南京大学日本語学科修士2年
1986年、安徽省合肥市の生まれ。専攻は日本文学。趣味は読書や旅行など。



柳本史教
前期教養学部理科一類2年、機械工学科内定
現在は機械工学科の授業以外にも思想や民俗学などの授業を履修しており、個人的に歴史や安全保障について勉強しているほか、サークル活動で国際法の模擬裁判をしています。

今回の南京大学と東京大学の学生交流プログラムは今年二年目で、交流の一環としてのチームワークの形の共同研究は初めてなのだ。ということで、手本になれるものがなく、すべてはチーム全員自身がゼロから試しながら、研究を行わなければならなかったのだ。我がチーム2は南京大生3名と東大生6名とからなり、配られた「空間と記憶」という哲学的なテーマについて、一緒に議論し合い、具体的な研究対象と研究方法を考え、研究計画と予定のスケジュールを決め、研究を行ってきた。

一、調査対象を見つけるまでのプロセス

今回の交流期間は一週間であり、このごく短い一週間の間に共同研究が順調に進めることを確保するために、交流が始まるまでに、実際に調査に入る段階の前の事前準備をすべて終わらせることを原則として、チーム全員の合意を得られた。その原則に従い、事前にいろいろな準備と手配をしなければいけなく、東大生側が討論会を二回行い、「空間と記憶」に関して、それぞれ自分なりの意見をチーム全員の前に述べ、それに基づいて、各自の提案をメールでチーム全員に回すことを決めた。南京大生はまだ中国にいたため、メールで、討論会の纏めを南京大のメンバーたちに知らせ、提案の提出の旨を伝えた。会えなくても、打ち合わせができるように、チームのメールリストを活用することが全員に要求された。

そして、メールリストを通じて、メンバーたちが積極的にいろいろな提案を出した。一週間という短い間に、楽しく研究を行うことを前提にして、「ジブリ映画における空間と記憶」をチーム2の研究テーマにすることにチーム全員が賛成した。その後、提案者の中村昂は2つ研究計画書を提出した。

（一）テーマA.『となりのトトロ』における記憶と空間

（1）概要

1.『となりのトトロ』を見てると、なぜか懐かしさにおそ

われることがある。なつかしさ、それは昔の「記憶」が呼び起されるということ。『となりのトトロ』のなかに描かれる「空間」にはかつての記憶を思い出させる力があると。そのちからについて調べる。

2.『となりのトトロ』は南京大学生にとっても東京大学生にとってもとっつきやすいテーマであり、活発な議論が期待できる。

3.『となりのトトロ』のなかで描かれる空間とは、おそらく日本人にとって馴染みの深い空間だと思われる。そのうえで、南京大学生と東京大学生がどのような受け止め方をするのか調べることは、同じ空間の認識に記憶というものがどのような影響を与えているか知る手掛かりになる。

4.三鷹の森ジブリ美術館を訪れ、そこで製作者側から見た本作品の空間についてインタビューを行う。また、本作品の設定は昭和30年代前半（1950年代であるから、その時代を知らない僕ら学生と知る大人の方々にインタビューを行うのも本テーマ考察のヒントになる。具体的には、東京大学の教授がインタビュー対象として適当ではないかと思われる。

5.問題点としては、作業対象が各人の作品への印象であるため、事実確認が難しく、議論は抽象的になりやすい。

（二）グテーマB.『千と千尋の神隠し』における記憶と空間

（1）概要

1.『千と千尋の神隠し』において、記憶と空間は重要なテーマとなっている。主人公千尋は突如、非日常的な「空間」に紛れ込んでしまう。そしてその空間から抜け出すとき、カギとなったのは自分の名前の「記憶」思い出すことであった。

2.世界的に有名になった本作品において記憶と空間がどのような関連を持つものとして描かれているか調査・研究する。

3.『千と千尋の神隠し』は南京大学生にとっても東京大学生にとってもとっつきやすいテーマであり、活発な議論が期待できる。

4. インタビュー対象は、三鷹の森ジブリ美術館の職員。
5. 問題点としては、作業が作品解釈に限られてしまうこと。そのような行為を好まない学生にとっては作業全てがつまらなく思ってしまうだろう。

研究計画書の書いたように、三鷹の森ジブリ美術館を見学し、インタビューを行い、『となりのトトロ』か『千と千尋の神隠し』という具体的なジブリ映画作品を分析し、ジブリ映画の中の空間と記憶の関係性について、研究を行う。メンバーたちが相談した上で、映画作品を『となりのトトロ』にし、「懐かしさ」という記憶と空間の関係性について、研究を行うことを決めた。

しかし、残念なことに、その研究の一週間、三鷹の森ジブリ美術館は月曜日しか開館しなく、月曜日に、南京大生は茶道体験に出かけるため、三鷹の森ジブリ美術館への見学ができなくなる。担当先生が無理して、茶道体験の時間をずらして、なんとか三鷹の森ジブリ美術館で見学する時間を作ってくれたが、チケットを予約したところ、完売になってしまい、三鷹の森ジブリ美術館での調査は完全に不可能になった。

研究計画を変えなければならなくなり、残った時間が少なくため、『となりのトトロ』というジブリ映画作品の分析を前の計画通りに進み、見学場所を最初の計画でも議論したもう一つのジブリ映画の名作である『千と千尋の神隠し』のお風呂屋のモデルとなった銭湯や都電旧車両が展示されている江戸東京たてもの園にした。みんなが、事前に『千と千尋の神隠し』を見ておき、空間と記憶に関係ある具体的なシーンを取り上げ、江戸東京たてもの園でインタビューすべき質問を提出した。それを踏まえて、研究計画書を書き直し、以下の通りになった。

(三) 討論計画

(1) 取り上げるシーン

- ・トトロの住処に通じる低い植物のアーチをもぐりぬけるシーン（高爽）
- ・新しい家に引越をして、家の中を駆け回るシーン（高爽・唐菊芳・河上）
- ・時空間の歪み（ネコバスによる移動のシーンや庭の木が一気に伸びていくシーンなど）（柿沼）

- ・さつきとめいと一緒に授業を受けるシーン（唐菊芳・于寧）
- ・雨の中、バス停でお父さんの帰りを待つシーン（唐菊芳）
- ・稲田のシーン（王香梅）
- ・怖がって大声を出すシーン（王香梅）
- ・お母さんに髪を櫛でといてもらうシーン（王香梅）
- ・足で服を踏んで洗濯するシーン（王香梅）
- ・めいが目を覚ましたら、トトロと出会った場所がなくなっていて、自分が嘘をついてないことを必死に証明しようとしたシーン（于寧）
- ・真っ黒くろすけに出会うシーン（河上）
- ・夜中にトトロと二人が芽を出そうと踊るシーン（河上）
- ・ネコバス（河上）
- ・さつきがめいを探して走り回るシーン（河上）

(2) やること

1. 方向性、最終的な目標を決める

まず、今回のグループ討論で目指すものを話し合って決める。基本的には、『となりのトトロ』を題材に記憶と空間の関係を調べる」ということになっているが、もっと細かい方向性を決めて考察対象を絞りたいと思う。言い換えると、この討論を通して答えをだす『問い』を設定したいと思う。例えば、『となりのトトロ』のどのような空間が懐かしさを感じさせるのか」というようなものである。

具体的に決める事項としては次のようなものが挙げられると思う。

- ①「となりのトトロ」を考察の中心に置くか、それともあくまで「となりのトトロ」は題材でもっと一般的な結論を導くか
- ②中国人と日本人の感じ方の違いを前面にだすかどうか
- ③「なつかしさ」を考察の中心に置くかどうか（なつかしさは与えられたテーマではないが、空間や記憶と密接な関係にある。考察の中心の置く場合、なつかしさと記憶、記憶と空間、空間となつかしさのすべてに関して考察するか、それとも絞るか）

この方向性を決める作業は重要な作業であるが、ここに時間をかけすぎても仕方がないので早めに決めてしましましょう。もちろんあとで変更も可能である。また、唐菊芳さんが方向性に関して提言してくださっているので、参考にてください。ま



インタビューを受けてくれた江戸東京建物の園の職員（左一）と学生たち。

た、ここで決めたことは全ての活動の基盤になるので、この話し合いに参加できなかった人も共通理解として把握しておいてください。

2. インタビューの質問を決める

1. 以得た目標に向かうような質問を決める。すでにいくつか意見がでているのでその中から選択する形でも、新しく考えだしてもかまわない。順番として、4のシーンを先にすべきかも知れないが、インタビューが火曜日と早いので先に回させてもらった。

3. インタビューをする (11/8)

以上で決めた質問を実際にインタビューしてみよう。また、江戸東京たてもの園で昔の日本の建物、空間というものを肌で感じてみよう。

4. シーンを選択する

みなさんの挙げたシーンはどれも考察対象として面白いシーンであるが、すべてやる時間はないと思うので多くても3つほどに絞りたいと思う。その際、選考基準としては、1の問いに答えを出せるか、記憶と空間の両方が絡むシーンであるかなどあると思う。

5. 各シーンについてそれぞれの意見を出しあう

ここが、今回のグループ討論のメインになる。各シーンについて各々が思ったこと、感じたことをまず述べる。それからそれを整理して考察していく。

6. まとめる

3のインタビュー・5の考察を発表できる形にまとめる。また、発表形式も決める。

7. 発表 (11/11)

6のまとめをもとに発表しましょう。また、発表後は他の班からフィードバックをもらおうと面白いと思う。

研究計画書に忠じて、具体的な研究も『となりのトトロ』に対する分析と江戸東京たてもの園の見学という二つの部分に分けて進むようになった。最初の計画した方向ではないため、この違う二つの部分の関連性はどこにあるのかということを実際の調査段階で探し、答えようとすることを決めた。

二、調査を行う前に考えていた「空間」、「記憶」の定義と「空間と記憶」の関係性についての仮説について

調査を行う前に、討論会で、メンバーたちの討論によると、「空間」といったら、具体的な建物や広場など実体の持つ空間が頭に浮かびやすいことが明らかに分かり、記憶も自分の成長や子供時代への思いなど単なる個人的なものに定着する傾向があったのだ。「空間」と「記憶」を二つの独立の概念として扱うことが殆どで、二つの概念を関連しながら、考えることが、なかなか難しかった。二つの概念の関係性を見出すには、「空間」と「記憶」という二つの概念を改めて理解しなければいけないことが分かるようになり、空間は前述のような実体の持つ空間のほか、文学や映画などのような文化的な空間という実体の持たない空間も存在し、記憶は一種の歴史、時間とも言え、共有することもできるのではないかと再認識することができるようになった。そこから、中村昂は映画という実体のない空間と美術館という実体のある空間二種類の空間を考察し、空間と記憶という時間の関係性を分析するという提案を出したのだ。前述のように、いろいろなことで、実体のある空間を美術館ではなく、江戸東京たてもの園にした。

「空間と記憶」の関係性についての仮説も立てた。時間としての記憶は人間にとって、非常に重要な存在であり、保存する必要があるのだ。保存するために、一定の空間が必要とする。そして我がチーム2の研究は『となりのトトロ』という映画(実体のない空間)と江戸東京たてもの園(実体のある空間)を分析し、それに定着し、保存された記憶の重要性を検討し、記憶



唐菊芳さんは建物を見た感想について見学者にインタビュー。



『千と千尋の神隠し』の中の建物をデザインする時に参考された子宝湯。



1856年に造られた酒屋という居酒屋。懐かしさを感じ

の保存における記憶と空間の関係性を明らかにしようと試みた。

三、調査内容

調査の内容は、『となりのトトロ』における空間、「江戸東京たてもの園における空間」、「記憶について」3つの部分にわけて纏めた。

まずは、『となりのトトロ』に関して、懐かしさとしての記憶と映画の空間について、研究を行った。『となりのトトロ』を見て、メンバーたちが自分なりに懐かしさを感じたシーンを取り上げて、分析を行った。『となりのトトロ』という映画空間で人々はどんな記憶を感じたのかについて、議論した。映画の中で描かれた空間は作者の作ったもので、もちろん実在しているものではない。しかし、この映画を見る人はどうして感動とか懐かしさとかを覚えるのだろうか。具体的な空間は時間の流れの中で、変わりつつある。二十年前、十年前の自分の生活した場所、行ったところは二十年、十年を経て、昔のままに目の前に展示してくれるのはもうありえないことだ。いくら昔のところに戻りたくても戻れないに決まっている。こういうとき、虚構的な、バーチャルな空間が登場して人々の夢を叶えさせて、慰めを与える。歴史を再現させるあるいは昔を遡るために有形な空間のほかに、こんな無定型な空間は比べ物にならない役割を果たすといえるだろう。記憶は無から生まれたのではなく、自分の体験したことについてのある無定型な記録だと思う。しかし、体験と記憶は一方進みではなく、両方はお互いに作用している。『となりのトトロ』を例として言えば、ほとんどの私たちはそれを好きになるのは、自分の昔体験したことが映画を見ることによって、再体験することができ、昔の記憶が蘇って、共感を覚えるからだ。これは体験があればこそ記憶を復帰させるのだ。多くの人が経験したことのあるものが描かれていて、でも、その経験したことを普段は忘れてしまっている。そして、主人公たちの気持ちがわかりやすく描かれている。それは『となりのトトロ』がみんなに好かれた原因になるだろう。それで、懐かしさとはいったいどんなものか。自分の子供時代に経験したあることの記憶は、時がたつにつれて、消えてゆくところか、何かのきっかけにぶつかると、経験した当時よりもっと濃くて深い感触がする。そのきっかけは実際的な体験当時の空間でなくてもかまわない。何か相似性を持っている実在な空間、あるいは虚構的な空間と出会えば、脳の中に潜んでいる昔の記憶が蘇るようになる。そしてそのとき感じるのがなつかしさである。

『となりのトトロ』を見て懐かしさを感じて、自分にとって大切なことを思い出して、今やそれからの人生にきっと何か役立つと思う。特に思い込んだり、困ったり、迷ったりしたときは。その大事な記憶が映画という虚構的な空間によって、保存されてきたのだ。

次は、現場調査で本チームは江戸たてもの園を見学することにし、職員と観光客へのインタビューを行った。江戸東京たてもの園では、現地保存が不可能な文化的価値の高い歴史的建造物を移築し、復元・保存・展示するとともに、貴重な文化遺産

として次代に継承することを目指している。そこで、空間と記憶について従業員や観光客にインタビューして、江戸たてもの園は江戸時代の様子、過去の記憶を保存する空間としての存在が分かるようになった。しかし、江戸たてもの園は江戸時代のことを保存する空間なので、『となりのトトロ』を見て自分がちゃんと体験したことのある記憶を思い出すとは違って、江戸時代のことは現在に生きる人たちにとってはあくまでもはるか昔のころだろう。それで、体験したことのない空間にも何か記憶があるのかということにも興味が出た。おそらく記憶というものはただ自分自身が体験したことを覚えるだけでなく、他人から教えられたり、教科書から学んだりしたことも一種の記憶にもなるのだろう。そして、そういう記憶も自分のアイデンティティになると思う。

最後のまとめとして、まずは記憶の大切さで、記憶を通じて、過去の空間をもう一度体験できるように感じる。そして記憶は自分が生きてきた証拠であり、今の自分を構成するかけがえのない一部分である。記憶がないと、今の居場所（空間）が分からなくなり、孤独、恐怖になってしまう。だから、困難があっても、保存する空間が必要で、映画という不定形な空間と博物館のような実体の持つ空間が記憶を保存する重要な形である。そういう空間で、自分がどこから来たのか、どこへ行くのか分かる。そういう空間で、記憶の伝承と共有を通じて、自分の民族的な共同記憶ができ、自分の民族への絆や帰属感ができ、民族のアイデンティティもできる。

ジブリの映画を見て、たてもの園のような建物を見学して、普通は大体懐かしさとかという記憶が呼び出されるようになる。こんな記憶は私たちの自己認識やアイデンティティとかずいぶん緊密につながっている。そういうものは誰にとっても大切だと思う。大切だからこそ、保存する必要がある。そして、その保存手段は今回の研究によると、有形的な空間と無定型な空間という二つの形式に分かれている。それから、保存された空間の形式によって、昔の記憶を呼び出すようになる。

四、調査を通して、「空間」と「記憶」の関係性についての新しい発見や実際に調査した結果が最初の仮説との違いについて

大きな違いがなかったが、もっと深く理解することができた。特に、江戸東京たてもの園で、学芸員のインタビューを通じて、記憶の保存、伝承について、仮説の段階で思いつかなかった新しい発見ができた。江戸東京たてもの園のような博物館や美術館など、ある意味で、記憶を保存し、伝承する空間である。しかし、昔、宝物だけが博物館で展示されてきた。ということで、保存されてきた記憶は宝物の持ち主である貴族や偉い人だけの記憶なのだ。江戸東京たてもの園は普通の民具も展示されている。現在、普通の民具が博物館に入ることができることによって、普通の庶民たちの記憶も保存され、伝承していくことになっている。人類の記憶がもっと豊かになっていくとも言えよう。

今回の共同研究を通じて、空間と記憶の関係性に対する認識が深くなり、チーム全員が良い勉強になったと思う。

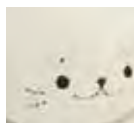
チーム 2. 都市シンボルのイメージ・空間・記憶 —東京タワーを例に—



呉修結（ゴ シュウテツ）（執筆）
東京大学大学院総合文化研究科修士 2 年
研究テーマは清末民国期の漢字文義謎（簡単に言えばなぞなぞのこと）です。趣味は絵を描くことです。



多月文哉
東京大学理科三類 2 年、医学部医学科内定
東大では奇術愛好会（マジックのサークル）と合唱団に所属しています。



杉江美祥
東京大学文科三類 2 年
最近の興味関心は旅と語学。今年の夏には初・中国、初・シルクロード行ってきました！



井出和輝
東京大学文科二類 2 年
運動会ゴルフ部に所属しています。中国の方と話したことが一度もないので、是非いろいろな話をしてみたいと思います。



森安芽衣
東京大学文科一類
大学では運動会アメリカンフットボール部と、アカペラのサークルに所属しています。



李艶（リ エン）
南京大学日本語学部 4 年生
1990 年 1 月 31 日江蘇省の塩城市生まれた。趣味は旅行、心理学、読書。



馬歩雲（バ ホウン）
南京大学日本語学部修士 2 年
趣味はサッカーで、今は FC バルセロナが一番好きである。修士論文は 1978 年以後の日本人の中国イメージの変遷。



範麗香（ハン レイカ）
南京大学日本語学部修士 2 年
研究内容は日本文化と環境保護との関係。趣味は書道と読書。

今回の共同研究のテーマである「空間と記憶」は、この二つのキーワードをめぐる様々な関係性が連想させる。調査対象を選択する前に、どういった視点から解題するのかが、まず解決すべき問題点である。そして、「空間」と「記憶」はあまりにも日常的な単語であるため、今まで論理的に考える機会もなかった（或いは考える必要はないと思っていた）が、実際に定義付けようとする時は切り口を探るのが意外と難しい。「空間」は一般的に考えると、物質的な居場所であり、「記憶」は脳による知識と情報の貯蓄である。そして、五感による「空間」に対する認識と他者からの情報等をまとめて、何らかの情報処理を経て「記憶」として長期的に貯蓄し、認知されるようになるだろう。他にも、「空間」をサイバースペースとして解釈し、「記憶の中の仮想空間」など様々なテーマにできるが、今回本チームの調査は主に実在空間に関する記憶の形成過程、つまり「空間」から「記憶」へと転換するのに欠かせない要素、またはルートを考察したいと考える。

一、調査準備

調査場所の範囲を東京都内に限るということで、まず、南大生メンバーを対象に調査地を決めるための事前アンケートを行った。アンケート内容は主に以下の 3 つである。

- 「東京」に対するイメージ、及びそのイメージの出どころ；
- 行ってみたい場所（具体的な地名に限らず、「一番高いところ」「昭和風の下町」「古書店街」などでも構わない）；
- 以上挙げた「行きたい場所」をそれぞれ五感——味覚（料理など）・嗅覚（街の匂い）・触覚（建築の材質や人込みの密度など）・聴覚（街の音・音楽）・視覚（風景・色など）から想像してみる。

アンケートの結果として、共通的に興味を持たれた場所は東京タワ

ーである。都市のイメージが聞かれると、確かに多くの人がシンボリックな建物を思い浮かぶが、それはまた一般の建築空間とは違い、符号化されやすい存在であるため、その都市以外でも膨大な情報が発生し、伝達されることが多く、逆に実在空間としての認識が薄れるところもある。そういった意味で、イメージ・空間・記憶を比較するのに適する場所であると、チームメンバー全員の同意が得られた。

したがって、研究計画は以下のように立てられた。南大生と東大生の仕切りを取っ払って、時間を軸として、今の世代（南大生+東大生）と昔の世代（東京タワーの設立過程を見てきた方々）のイメージの相違及びそのイメージ形成の理由に着目する。

昔の世代にはインタビューを行うことにした。インタビューの対象は東京タワー周辺に住んでいる・働いている人にし、初歩的に二箇所の方に決定した。一箇所目は徳川将軍 6 人の墓所がある東京タワー界限では随一の寺である増上寺。現在古くから勤められている職員の方が何人もいるため、その方達にお話を聞けるかもしれないとのことであった。二箇所目は「あか羽」という鳥料理の老舗であり、女将が電話に出られ、「あか羽」が昭和 23 年頃に赤坂で創業、昭和 43 年に現在の東京タワーの傍に移転したなどと紹介してくれた。女将自身は 15 年程前からしか店に関わっていないと聞いたが、東京タワー建設の時代を経験していたため、インタビュー対象として依頼した。

南大生には、中国国内で接触した東京タワーに関するもの、例えば、テレビで見た東京タワーの映像・小説に書かれている東京タワー・東京タワーを書いた歌詞・東京タワーの絵などを東京に持ってきて頂く。映画、ドラマなどで見た東京タワーの映像、ネットサイトで検索された資料などによって、イメージ上の東京タワーを推測する。そして、実際に東京タワーに入り、五感様々な項目でその空間体験

を記録する。事前のイメージと実際の体験を比較し、その相違が生ずる理由と空間の体験を記憶に転化する際に関与する諸要素が何かを考える。

二、調査経過

(一) イメージ・情報の整理 (11月8日午前)

南大生が中国国内で見た東京タワーに関するドラマ・映画の中に、最も深く印象を与えたのは江國香織が原作小説を描いた『東京タワー』である。映画の名シーンには、東京タワーが天に突き刺し、東京の中心・日本の中心にあるという描写がある。その他、ドラマ『華和家の四姉妹』は、主人公の両親が駆け落ちをし、東京タワーの下で「絶対幸せになろうね」と誓った後二人は結婚し、四姉妹を産んだという回想から始まり、最後に父親が東京タワーに再び訪れ、昔の誓いを思い出すというストーリーであるため、愛を誓うロマンティックな場所というイメージを与えたという。また、日本のポップソングなども実物を見たことのない南大生に色々想像する余地を与えた。例えば小松未歩が作詞した『東京日和』は、東京タワーから始まるドライブルートが描かれている。それもやはり東京の中心に立つロマンティックな都市シンボルという印象を与えたのである。

南大生が東京タワーの中を五感別々で想像したものは以下のよう整理してみた。視覚の面では、エレベーターが上の展望室に直通し、最も高い展望室は360度ガラス張りであり、そこからレインボーのように七色で光るレインボーブリッジが見えると想像された。また、展望室の中央に螺旋階段も設置されており、その周りには多くのテーブルや椅子が置かれてあり、観光客がそこで休憩できるという環境ではないかと。そして、まだ11月だったが、既に街中はクリスマス一色に染まっていたので、東京タワーも既に飾られ、恐らく外または中にはクリスマスツリーが置かれてあるのではないかと。

また、東京タワーを象った着ぐるみを着て宣伝するスタッフがいることや、東京タワー建設当時の歴史を紹介するパネルがあり、アナログ放送が終わった後にテレビタワー機能の移転に関する展示

があるなど、様々な予想がされた。聴覚の面では、東京タワーの建物内には常に明るい軽音楽が流れており、音楽と人の声が混ざり合っており、ガイドのアナウンスも流れていると予想された。味覚と嗅覚の面では、最高層の展望室には恐らくレストランなどないが、ふもとのほうにレストランが多数営業している。ファミリーレストランやファーストフード店、カフェなどがあるのではないかと推測された。さらに、高級なフランス料理店もあると推測され、理由は中国のタワー式ビルに通常高級レストランがあるというイメージが強いことと、パリのエッフェル塔を連想したからである。

東京タワーがロマンティックなイメージがあるため、夜景を見ながら、プロポーズ或いは記念日などの特別な日に訪れられる予想である。触覚の面では、外側は全体的に鉄・スチールでできている。中央には鉄の柱があり、建物の部分の壁だけが普通のコンクリート製ではないかと。また、タワーの外部は普通のペンキではなく、特殊な塗料で赤と白の二色に塗られていると予想された。

そして、イメージしにくい部分とインタビューで聞きたいことについて討論した結果、以下4つの質問を立てた。

1. (増上寺の職員を対象に) 仏教の塔と東京タワーのような現代的なテレビタワーとのイメージの相違について。
2. 東京タワー建設前後の街の風景の変化について。観光客が増えるにつれて、街はどう変化したのか。
3. 3・11の大地震後、東京タワーの先端が少し曲がったというニュースを聞いて、ショックを受けたか。
4. 始めて東京タワーを登った感想について。

(二) インタビュー (11月8日午後)

① 増上寺寺務所会計課職員

インタビューを引き受けた職員は昭和54年9月に増上寺に就職し、最初から境内に住み込みでいた。就職した前の東京タワーに対するイメージに関して、東京タワーが昭和33年に完成して以来ずっと観光名所とイメージだという。その後次々と高層ビルが都内で建



東京タワーと増上寺。



東京タワーのライトアップ。



増上寺でのインタビュー。



東京湾観光協会のスタッフ（左二）と学生たち。

設されたという記憶についても詳しく話してくれた。東京タワーの周辺一帯で意外と高い建物が見当たらないことについて、芝公園の敷地内に高層ビルが何%以上占めてはいけないという厳しい規制があると説明。そして、増上寺境内にもともとある仏教的な塔については、第二次世界大戦中に焼失したという。明治時代の境内全図を参照させながら、東京タワーが建設される前の増上寺界隈の地形を解説。五重塔が焼失した後、代わりに東京タワーが立つようになることで、違和感を感じているかどうかという質問に、勤め始めた当時は既に東京タワーが完成したため、特に違和感はない、ただの電波塔だ、と答えた。

東京タワーの建設地として芝公園が選ばれたのは風水的な理由はなかったか、という質問に対して、風水的な理由はなく、電波が関東圏全域をカバーするのに適する位置と高台であるからと答えた。将軍家のお墓がある寺院として、江戸城の裏鬼門に位置するという説はあるが、東京タワーの立地とは関係がないようである。観光地というイメージがあったので、周りにおみやげや記念品のお店が多く並ぶとチームメンバーらは想像したが、実際に見ると東京タワーの周りに商業施設がほとんどなく、それはすごく印象的である。理由をたずねてみると、増上寺自体が江戸時代に一般人がお参りできるお寺ではなかったからである。故に増上寺の周りには、浅草の浅草寺や長野の善光寺のような賑やかな門前町がない。

戦後になって時代が変わり、増上寺にも一般の方がお参りできるようになったが、やはり昔の流れとして、観光地らしい商店街ができていない。東京タワーもその場所に建設された関係で、売店等は全部タワーの中にある他、中には蠟人形館や水族館などの催し物もある。その結果、修学旅行の学生団体や観光客のほとんどはバス移動で東京タワーに訪れ、一日か半日、中で見学・食事・買い物をしてまたバスで別の観光スポットに移動するため、周辺に売店や飲食店が特に必要ではないという。実際に東京タワーの隣に勤めてから、東京タワーの変化については、ライトアップが挙げられた。様々な色の照明が季節に合わせて変えていることや、年越しの時に数字が出されていることが近年からの楽しみだという。東京タワーが東京の中心というイメージについては、実際に地図からみても、中心ではなく南側だが、イメージ上の話としてかなりの人がそう信じているらしい。東京タワーに対する特別な感情はあるかと聞いたとき、特に特

別な感情がない、ただの電波塔だと思っているようである。

②鳥料理店「あか羽」女将

お店が移転されてきた前からタワーを見ていたという。しかし、東京タワーができた当時に嬉しかった、大きい物ができたなどといった印象はあまりなかったそうである。実際に東京タワーの隣にお店をオープンして、関わってきただけのお客の「こんなに近いんだね」という言葉によって意識ははじめたという。周りに商店街がないという点については、官公庁とオフィス街であるため、住居者が少ないの一番の理由だと。東京タワーのように、建物の内部ですべてできるような観光スポットは町おこしの効果はないと断言した。それが新しくできた都市シンボルの東京スカイツリーにも同様に発生することであり、現在下町にあるお店は逆に不景気になるのではないかという。

タワー式観光スポットと周辺地域の関係について、我々が全く予測出来なかった店経営者ならではの見解を聞かせてくれた。3・11の地震後、東京タワーの先端が曲がってしまったことが中国のテレビニュースに何回か取りあげられたことを伝えと、日本では地震後の一回きりで、それから一切報道されておらず、周りの人もそれを言わないようにしていると言った。理由を聞くと、恥ずかしいから、直すのに大変らしいと答えた。近すぎると、窓からは東京タワーの足しか見えないという女将の話が印象的であり、日常の一部となった空間に関して、特別な記憶は形成しない場合もあるが、記憶とまた別な形で情報が生じてくるのではないだろうか。

③港区観光協会スタッフ

最後にインタビューした港区観光協会のスタッフは東京タワーの内部に勤務する方である。臨時にインタビューすることになり、前記の二人とまた対照的なコメントを聞くことができ、意外な収穫と言える。前記の二人と違ったのは、東京タワーを単なる電波塔と思っているのではなく、やはり人々にパワーを与えていると、より主観的な見方を見せたところである。特に地震後、東京タワーが節電するため一時ライトアップを中止していたが、全国から多くの手紙が届き、ライトアップしてほしいとの願いだったという。

そのことにより、人々の思いが託される都市シンボルとして東京タワーには精神的な役割もあるということを実感したようである。インタビューをする時期に東京タワーで大河ドラマ『江～姫たちの戦国～』の展示をやっていた。何故かという、江の夫である二代將軍



親切に接してくれた鳥料理店「あか羽」女将（右三）と学生たち。



共同研究の発表風景

徳川秀忠が江のために、江戸城から現在東京タワーが立っている高台に楓の木を植えたことで、曾て「もみじ山」という地名がつけられていたという。東京タワーの建設にいくつかの候補地はあったが、芝公園界隈の地盤がとりわけ固いのと、各テレビ局に近いという利点で最終的に選ばれたと説明してくれた。東京タワーの高さである333メートルは特に意味づけはされていないとのこと。タワーの中の催し物である蠟人形館と水族館は建設当時からあったのではなく、約30年前に建てられたのである。最初はソニーやパナソニックなどの企業のショールーム及びスタジオが入っていたという。

当スタッフは就職してから四年目であり、大学時代に名古屋から東京に来たとのこと。実際に東京タワーで勤務し始めてイメージがかなり変わったと言った。それは、毎日東京タワーに来る観光客の数が想像より遥かに多いからである。年間30万人、平日は平均五千人が来て、休日は一日あたり一万人であり、ゴールデンウィークやお盆・お正月の時期には一日二万人ぐらゐが訪れるという。周辺に商店街など何もないため、さらに人数が集中していると感じたかもしれない。東京スカイツリーができることによって、東京のシンボリックなタワーと思い付いた時にこれからはスカイツリーのイメージがどんどん浸透していくだろう。それに対して東京タワーは何か戦略あるかと聞いた。震災を経てレジャー産業が全面的に縮小する中、東京スカイツリーが早くオープンすればいいとの願いもあったらしく、新しい東京の都市シンボルと一緒に東京を盛り上げたいとのこと。

地デジに移行した以上、電波塔としての東京タワーの役割もやはり変わっていく。観光地としての一面がどんどん大きくなるとメンバーらが予想したが、スタッフの回答が意外にも観光地というイメージから脱却しなければならないというのであった。それは、観光地よりも普段から来やすいように、より便利なショッピングができる場所に変わるということである。また、最近力を入れていると言われるのは、地方自治体とのコラボレーション、いわゆるアンテナショップの設置である。展示会をやるのにどこかのホールよりも、東京タワーと言えば誰もが知っているところであるため、負けない知名度による宣伝効果が大きいという。現在東京タワーの収入には「観光」と「電波」という二本の柱があり、電波のほうが増減しているが、これからも予備電波塔としての役目を果たし、ラジオ放送またはモバイル通信専用に変えていくとのことである。現在は最上部のアンテナが少し曲っているが、機能的に何の支障もないそうである。修理は2012年以降とのことである。

以上三人のインタビューは、それぞれ東京タワーという実在空間の過去・現在・将来について語ったものと言えるだろう。

(三) 実際の空間に入る(11月9日夜)

南大生一行が東京に着いて二日後に、東大生の同行で始めて東京タワーの中に入った。

チームメンバーの叙述によると、展望台には、螺旋階段も、テーブルと椅子もなく、そもそも広い空間とは言えないため、休憩場所が設置されていないことは合理的であると思われる。そして、高級レストランはなかったが、カフェなどはあった。クリスマスの装飾とツリーが飾られていた。着ぐるみのマスコットキャラクターはなかったが、ぬいぐるみの記念品が販売されている。聴覚の面では、アナウンスと

人々の会話の音が建物の中を充満していたとのこと。最も衝撃を受けたのは東京タワーの色に対するイメージだという。今まで赤と白の二色だと思い込んでいたところ、実際にはオレンジと白である。恐らく映像を通して見た色が多少差があり、夜景モードだとオレンジ色が赤く見えるのが原因だと推測された。

三、調査結果

最初に「空間」とは物質的な居場所と定義したが、それに伴う問題の一つはその範囲をどう考えるのかである。例えば、東京タワーの空間について調査する時、一体どこまでが「東京タワー」なのか、建物の内部だけなのか、それとも増上寺や芝公園一帯も含めた周辺地域全体なのか、地理的・物質的に範囲を決めるのは自由だが、基準がないため、今回のテーマにとってはむしろ無意味である。つまり、実在空間であっても、物質的に区切られるというより、主観的に区切った認知上の範囲と言えよう。そして、我々は普通「空間」をいう時、複数の対象ではなく、無意識に単数として認識しているのではないだろうか。以上をまとめると、「空間」は主観的に区切られた認知範囲のユニットである、という定義も成立すると思う。

今の時代は情報が発達していて、家から一歩も出なくても、離れた空間を目で見るできるようになっている。まさに空間の限界、距離の限界を曖昧にしている世の中になっている。しかし、テレビやネットなどで見れる空間の映像は実在空間を入れ替えることができるのだろうか。今回の調査ではっきり「できない」と言えた。科学技術がどんなに進んでいると言っても、この身で体験し、視覚だけでなく五感で感じないと認知できないことが数知らずであるとメンバーが知った。

記憶というのは、やはり実在空間と繋がっていないといけない。そうでなければ、「記憶」と単なる「想像」と内容的にそう変わらないことになるからである。「記憶」は貯蓄されている知識と情報である、という言い方によっては、静止するものだと思われがちかもしれない。実際、今回の調査を行う前には、「空間」を認知の対象(いわば始点)、「記憶」を認知の結果(いわば終点)と無意識に設定したのであった。

「記憶の損耗」「記憶の改ざん」などは一般に考えられる問題かもしれないが、今回の調査を通して見えてくるのは、見過ごしがちな「記憶の更新(再生)」の過程であると考えられる。例えば、最初に整理した東京タワーという空間に対するイメージは、曾て見た映像、または実際に入ったことのある他の建築に関する記憶によって形成された。さらに他人の東京タワーに関する記憶(記憶の中の東京タワー)が加わり、自らの想像と他者からの伝聞情報が混ざり合い、より詳細なイメージが作り上がる。その後、実際に物質的空間に入り、五感で感じ取り、経験したことをイメージと照合して、相違する部分を修正していく。このような一連の情報処理によって、新たに東京タワーの「記憶」が形成される。それは、実際に入ってから経験と修正したあとのイメージだけではなく、過去の記憶や他者の記憶も含めたものである。「空間」は意識的に区切ることができるが、「記憶」は区切ることができない。

チーム 3. 空間の記憶・記憶の空間



篠原翔吾（執筆）
東京大学総合文化研究科修士 1 年



前田健太郎
東京大学理科一類 1 年
僕は京都から今年の四月に東京へやって来ました。趣味は自転車です。町のいろいろな所へ出かけることです。



徐夢荷（ジョー ムカ）
東京大学理科二類 1 年
中国の出身で、1 年前に日本に来ました。大学ではアカペラをやっていて、歌が大好きです。



三井礼子
東京大学文科三類 2 年
高校まではバレーボールをしていました。ということで、スポーツが好きです（下手ですが）。あと、友達とカラオケに行くのも好きです。



李瑩瑩（リー エイエイ）
南京大学日本語学科 4 年
故郷は中国東北地区遼寧省の錦州市。普通授業以外に本を読んだり、ドラマを見たりして時間を潰す。



陳建旺（チン ケンオウ）
南京大学日本語学科修士 2 年
出身地は江蘇省宿遷市。専攻は日本近代史。趣味はスポーツ（バスケットボール、ピンポンなど）、スポーツ観戦など。



徐海強（ジョー カイキョウ）
南京大学日本語学科修士 3 年
1988 年、安徽省生まれ。2009 年南京信息工程大学日本語科卒業。専攻は言語文化学。

一、はじめに：テーマの決定、設定、問題意識

今年の南京大学交流プログラムでは昨年までなかった共同研究に主眼に置かれ、東大生と南京大生がチームを組んで一つのテーマに関して話し合い、プログラムの最後に研究成果を発表することになった。大テーマは「空間と記憶」。私たちはこれをより具体的に理解するために、まずは実際に私たちが過ごす物理的空間から研究テーマとしてふさわしいと思われる「空間」を切り取ることから始めた。1週間という活動期間（制約された時間）と移動可能な場所（制約された空間）、それに私たちのキャパシティの範囲内で考えた結果、灯台下暗し、まずは私たち東大メンバーにとってもっとも身近でありながら、意外と知らない「東大駒場キャンパス」あるいは「駒場」という空間を、その歴史を追うことで探ってみようという意見が挙がった。これはまた、共同作業などで東大生と南京大生が十分に時間をとれるようにという便宜の策でもあった。しかし実際、南京大メンバーはほぼすべての講義を駒場キャンパスで受講することになっており、駒場を共同研究の対象地にしたのは彼らが日本に滞在している1週間のうちのほとんどを駒場で過ごすことになってしまう。そのことも鑑み、フィールド対象をもう一度考え直すことにした。時間や移動の制限といった問題は残る中、南京大メンバーにも喜んでもらえて、かつ研究対象としておもしろそうな場所をと考えた結果、次に「駅」・「神社」・「タワー」の3つの候補が浮上してきた。

「駅」については「私たちが普段の生活の中で通り過ぎ行く場を再考することで、駅舎の建築や都市における駅の存在といった空間概念やそこに集積された歴史の重み、人々の記憶というものを考えることができる」といった意見。「タワー」に関しては「1958 年の竣工から戦後、私たちが過ごす東京という時間と空間を貫き、この都市を代表する象徴的建築として機能し、記憶されてきた東京タワー。またこれから新たなスポットとして注目を浴びようとしている東京スカイツリーの完成を目前に、これらを題材に空間と記憶の関係について理解を深めることができるのではないかな。また、人の記憶に描かれるタワーと都市の集団の記憶として蓄積されるタワーの像に

はどういった違いがあるのだろうか」といった疑問をもとに考えようという意見。だが最終的には「神社」というテーマに絞って空間と記憶について共同研究をすすめることになった。

以下、その内容について記していきたい。

二、調査内容：研究目的、研究手法、フィールド調査概要

私たちは共同研究をはじめるとあたって、「日本人にとっての神社とは？——神社をめぐる『空間の記憶』と『記憶の空間』というテーマを設定し、次のような3つの課題を考えた。

1. 日本人は「神社」という空間をどのように「記憶」し（「空間の記憶」）、そこを訪れているのか？
2. 世代の差で「神社」に対する意識の差はあるのか？もしあるとすれば、どのような差があるのか？
3. 人々はどのようにして神社という空間を他の空間から区別し、認識しているのだろうか？（「記憶の空間」）

そこで、南京大生との観光も兼ねて明治神宮をメインのフィールド調査の対象地とした。また「神社」といっても明治神宮はその建立経緯や機能が特殊であり、明治神宮でのフィールド調査をもって「日本の神社」と一般化することはできないため、街の中によくある、私たちがふだんよく目にし、一般的に「普通の神社」と呼んでいるであろう、地域に根ざした比較的小規模の神社も調査対象とし、明治神宮を相対化しようところみた。以下は共同研究発表レポートからの抜粋であるが、神社の概略と研究手法が示されている。

（一）明治神宮と稲田神社へのフィールドワーク調査

明治神宮：大正 9 年に明治天皇を祭神として、神道的な実践を日本国民統合の支柱として建立された神社

稲田神社：渋谷区原宿にある小さな神社。旧稲田一円の産土神で、天正十九年（1591 年）伊賀衆が稲田の地を家康より賜り給地となり、以後江戸時代は第六天社と称して、明治維新の際に稲田神社と改

称。ご祭神は美容、技芸上達、縁結びの神として尊崇される

(二) 明治神宮参拝者へのインタビュー調査

実施日時：2011年11月8日午前10時頃。立冬の日で御衣祭(おんぞまつり、神様の衣

替えの儀式)が行われていた関係か、下見に行った前日より参拝客が多かった。

実施場所：明治神宮境内、本殿付近

調査対象：明治神宮参拝客及びその他、合計13組

調査実施の前日(7日)に前田と篠原が明治神宮に下見に行き、宮司へのインタビューも依頼したが、宮司も法人組織の一員であり、個人の見解を述べることは難しく、一般参拝に関する案内以上の情報を伝えることはできかねるとのことだったので、今回の調査では明治神宮側に意見を求めることは控え、一般の参拝客にインタビューを行うことにした。

本調査では7名がグループに分かれ、それぞれ異なる世代の人たちにインタビュー調査を行い、参拝目的や明治神宮の印象、日本の神社に対する意識や考え方などをベースに個々で話を展開してもらった。

インタビュー調査対象者一覧(発言内容は省略)

番号	調査者	被調査者(サンプル)	年齢(世代)
①	篠原、徐(海)	参拝客(夫婦)2名	70代夫婦
②	篠原、徐(海)	台湾人カップル2名	20代後半
③	徐(夢)、李	明治神宮崇敬会のバスガイド4名	20~30代女性
④	徐(夢)、李	中学生と引率教員計4名	10代&30代女性
⑤	徐(夢)、李	ドイツ人3名	70代男女2名、40代男1名
⑥	徐(夢)、李	女性	70代
⑦	前田、陳	女性	70代
⑧	前田、陳	女性	70代
⑨	前田、陳	男性	70代(戦前)
⑩	前田、陳	男性	70代
⑪	三井	友人	20代女性
⑫	三井	知人	20代男性
⑬	三井	知人(中国人留学生)	20代男性

三、インタビューの結果の分析、わかったこと

インタビュー調査の後、各インタビューグループの聞き取り内容を寄せ集め、神社とはどういう空間として記憶・認識され、記憶されているのかについて討論を行った。そして、神社という空間がどのように記憶され、機能しているのかを5つに分類した。以下、それらを一つ一つ検討してみたい。

(一) 神聖なる空間

インタビューでの「神社に行くとおちつく」という発言には2つの方向性が考えられる。すなわち、第一に、神社は「宗教的に神聖な場所」としてとらえられていることがわかる。それはまず、神社という空間が日本の人々に「俗から切り離された聖なる場」として認識され、記憶されており、そこを実際に訪れることによってその記憶と現実とがリンクし合うことになる。

また、例えば、鳥居をくぐったり、参道を歩いたり、一連の儀式的行動をとることによって、そこが非日常的な場として特別な場としての意味合いを持ち、そういった物理的手順をこなした(あるいは身体的制限を受けた)結果生まれる「非日常的プロセス」が人々に神社という場を「世俗から切り離された」「神聖なる」場として認識させ、精神的やすらぎをもたらすのではないだろうか。

(二) 都会のオアシスとしての空間

第二に、木に囲まれた神社という空間は「都会の喧騒からは一歩離れた憩いの場」として利用される場合も多い。それはインタビューでの「自然が多くて好き」という発言にも見てとれるが、明治神宮の場合、広大な敷地面積にもかかわらず、入り口の数3つの門や周囲を取り囲むうっそうとした木々は周囲の音や景色を遮断し、空間的にも都会から切り離された場となっており、人々に都会にいることを忘れさせる機能をもっている。

(三) 教育の場としての空間

インタビュー対象の中には茨城県から校外学習として明治神宮に来ていた中学生がいた。インタビューによれば、日本の伝統文化を体験させるものだということだったが、なぜ、わざわざ茨城県から明治神宮に来るのだろうか。ここからうかがえることは、第一に「神社が日本の伝統文化を象徴するもの」であり、また神社が「日本の伝統文化を実体験で教育するのにふさわしい場」として中学教師によって選定されていることである。わたしたちのメンバーの中にも小中高の遠足や修学旅行といった学校教育の中で神社に訪れることがあったという指摘が多かった。中でもとりわけ、厳島神社や日光東照宮、京都・奈良の有名な神社など、日本の歴史を学習する上でも重要といえる場所が選ばれる傾向が高かった。また、これとは別に、ドイツ人夫妻のインタビューでは、夫がエンジニアで建築関係についても学んでおり、そういった視点から日本建築としての「神社」を見に来たといった意見もあった。

(四) 地域交流の場としての空間

インタビューの結果、その地域に根づいた神社を想定することが多いことがわかった。夏祭りや秋祭りなどの行事をとおして、普段なかなか会わない近所の人々との交流の場として機能していることもわかった。

(五) 観光スポットとしての空間

インタビューで、ある日本人のご夫婦は和歌山県から訪れたそうだが、それ以外にも台湾やドイツからの観光客がインタビュー対象に含まれていたことからわかるように、明治神宮は国内外を問わず知名度の高い東京を代表するような観光スポットとしての空間的役割をもっていることがうかがえる。

世代による神社に対する意識について、大きな差は見られず

日本人に限って言えば、世代による大きな違いは見られなかった。インタビュー調査を行う前、私たちは若者世代と年配世代では神社に対する意識に差があるのではないかと仮説をもっていた。それは明治神宮のもつ「戦争の記憶」として残る特異性を意識してのことだったが、今回の実際のインタビューではそのことについて大きくは触れることがなかった。確かに、今回インタビューすることができなかった「明治神宮崇敬会」の会員のような方の中には



明治神宮の絵馬掛。絵馬にどんな思いが寄せられているのか。

「戦争の記憶」を留め、「明治神宮」に特別な思いを寄せる方もいらっしゃるのかもしれないが、一般に参拝していらっしゃる70代の方々の中でも「神社」といって「天皇」や「戦争」といったことについて真っ先に語りだすような方は、今回の少数のインタビューの中では見受けられなかった。むしろ、私たちの世代の方の中にも「神社に行くと、ここは昔どんな人が来たのかなど歴史に思いを馳せる」といったような意見もあり、世代を超えて、神社という場所は「空間を以て時間に替える」、つまり、「時間の流れを凝縮した、古き良き場所」と認識されていることがわかった。

「記憶」の蓄積、そこから生まれる「神社」という「空間」

また、もう少し、別の世代の違いという観点から述べると、「神社」という場が「神聖な場」として認識されるのは「教育」によるものと考えられる。例えば、神社の「公園の側面」を利用する形で、親が子どもを連れて神社に遊びに行った際にも、親は「本殿にお賽銭を放り投げ、鈴を鳴らし、二礼二拍手一礼をする」といったような儀礼的行為を通じて「神社はこうすべき、特別な場所なんだ」といった教育（というか、しつけというか、そういった情報の伝達）を子供にほどこすことがあるかもしれないし、また、子供が自発的に親のしている行為を見よう見まねで覚えようとするかもしれない。またこれらとは別に、七五三の時などにももらった「神社にまつわる日本神話」の絵本などを読み聞かせることによって、人々の頭の中における思想空間としての「神社」が立ち上がってくるのではなかろうか。このような一連のプロセス（すなわち、神社という物理的実存空間を訪れるという実体験と知的情報による思想的体験という二層の体験）をとおして、神社という空間についての記憶が人の脳の中に構成、蓄積されていき、これによって「神社という日常（あるいは世俗）から切り離された空間」という認識が徐々に形成されていくのではないだろうか。

四、反省点

これらの調査の反省点として、挙げられたものを以下に示す。

南京大学の賀曉星教授からは研究手法についての指摘があった。まず、研究テーマに「日本の神社」を掲げ、調査地を「明治

神宮」に設定するにはかなりの難があること。またこれと同じく、インタビュー対象地の選定以外にも選定数やその周辺環境との調査が不足していたこと。インタビュー調査で相手（話者）が語った内容がそのまま確証的であるとは限らず、それ以外の情報も汲み取れるよう心がけること、などが挙げられた。またメンバーの中からは徐海強さんから議論が少なかったことが指摘された。

東京大学のほうがすごく面白いテーマを提供してくださったのに、東大生が授業かバイトから来られなかったり、南大生が講演を受けることなどで出席できなかったり、結局本チームでは議論が二回しかなかったです。せっかくの交流プログラムですが、交流が多くできなかったのが残念だったと思います。（徐海強）

これらは私たちの準備不足にもよるものだが、今後のプログラムでは全体のスケジュールなどを調整するなどして、今回の反省点を生かしていけたらと思う。

五、最後に：南京大学メンバーの感想

南京大学メンバーの3人が今プログラム全体および共同研究についてどのような感想を持っているのか、彼らのレポートから引用しながらまとめてみたい。

3人とも初めて日本を訪れたということもあり、日本のあちらこちらに新鮮さを感じるという感想が多かったが、中でも日本のサービス業と環境に関心を抱いているのが印象的だった。

私は初めて外国に行きました。日本へ行ったのは本当によかったと思います。日本は確かに物質的な豊かさとサービス業のやさしさを有して、生活がとても便利だと感じます。環境には、中国より空が青くて、空気も新鮮です。そして、東京大学へ行けたこともありがたいと思います。東大学生達の活躍と短い間感じた学校の雰囲気はある程度私の生き方を変えました。私も自分の青春の汗を流したいです。私も興味のあることに夢中になりたいです。（李）

きれいな国、そして親切な国民、これは一週間の日本生活体験後、私



進行中の奉式



七五三を祝っている家族。



絵馬を掛けている家族。



鳥居の前での写真。



拝殿の前にある手水場。

の日本に対するイメージです。東京に着いた最初の日に、町にはゴミ箱がほとんどないということに気がきました。しかしながら、道にはゴミ一つも捨てられていないのにびっくりさせられました。道を歩く人々のゴミはどこに捨てただろうとずっと考えていました。そして日本のサービスの親切さを初めてこの身をもって実感しました。どこへ行っても笑顔で扱われて時折買わなければ店員には済まない気がしてたまらなくなります。(陳建旺)

……普通の日本人の行動や考え方の違いなどに新鮮なイメージを受けました。東京のような大都会には一戸建てがとても多いのが不思議に思いました。道のきれいさも空の青さもとても印象が深かったです。(徐海強)

最後に、共同研究に関する南京大学メンバーの感想や意見、分析などをもって本レポートの締めくくりとしたい。

共同研究を通してテーマ「空間と記憶」についての理解も深くなりました。うりのチーム4が明治神宮という空間を選んで、その場を歩いたり、参拝する人(外国人も含む)をインタビューしたりして、日本人と神社との関係そして不変な空間においてその関係の時間的変遷を検討しました。結果として、神社は日本人の精神的な落ち着きの場所、初詣や成人式または七五三などの行事を行なう場として利用され、日本人の生活には不可欠な存在ということがわかりました。(陳建旺)

(「神社」という空間の5つの役割・機能について) 同じ空間なのに、どうしてこれほど多くの認識が出て来るのでしょうか。根源となるのが「空間」という概念は実際「意識」によって構成されていることです。言い換えれば、「記憶」です。いわゆる「空間」は「記憶の空間」です。同じ客体に対して、違う主体の認識あるいは記憶が一致しないに違いありません。性別、年齢、国籍、知的構造などが人間の記憶に影響を与えています。空間というのは人間が自分の都合で認識して記憶すると考えられます。いっぽう、客体としての「空間」が常に変わりますから、それに伴う「空間の記憶」も常に変わります。とすると、考え方が最新の情勢を追わないと、時代に遅れるかもしれません。要するに、今回

の共同研究を通してわかったことは「空間」も「記憶」も相対性に富んでいるので、これから長い時間と大きい空間を背景に客観的な立場に立って、客体を捉えなければなりません。(徐海強)

今回、私たちチーム4は神社をめぐる、空間と記憶の関係を研究しました。ですから、私も神社を例として、共同研究を通じて見てきた空間と記憶の関係を話したいです。大体四つの点があります。

(一)「記憶」に存在する「空間」の形

共同研究の結果によって、神社は五つの空間として存在しています。神聖なる空間、都会のオアシスとしての空間、教育現場としての空間、地域交流としての空間、観光スポットとしての空間です。神社を言えば、人によって話し出した言葉は違いですから、神社という空間は人によって記憶の中で存在する形も違うと思います。したがって、記憶の角度からいうと、空間は記憶にそれなりの形で存在していたと思います。

(二)「記憶」の蓄積から生まれる「空間」

共同研究を通じて、私たちは「記憶の蓄積、そこから生まれる神社という空間」の結論を出しました。親は子供を連れて神社にいった際に、儀礼的行為を通じて、無意識に神社への記憶を子供たちに伝えました。七五三の時などにもらった「神社にまつわる日本神話」の絵本などを読み聞かせることによって、少なくとも神社への知識を手に入れました。このような知的な情報と神社へ行くことを加えて、子供たちは神社はこういうような場所だと認識するかもしれません。

(三)「空間」に刻み込まれた「記憶」

今回共同研究のために、チーム4の皆さんと一緒に明治神社へ行きました。もしかして、明治神宮の写真を見たら、あるいはもう一度明治神宮にいったら、チーム4の皆さんと一緒にのシーン、インタビューしたこと、参拝したことなどすぐ頭の中に浮かぶべきだと思います。これは皆さんと一緒に記憶は明治神宮という空間に刻み込まれたからだと思います。

(四)「空間」から表現された「記憶」

明治神宮という空間は人間のように自分の記憶があるはずだと思います。明治神宮について歴史的なことを詳しく知らないですが、ただ建築、鳥居、参道、本殿及び神主さんの衣服から見れば、明治神宮は宗教の場所だと知って、当時の人たちは明治天皇への尊敬の意味も分かりました。(李)

チーム 4. 記憶の反映と相違



近藤昭啓（執筆）
東京大学法学部 2 年
趣味で心理学や中国語、スペイン語をやっています。普段は手品をやったり、合唱をやったりしています。



岡野公彦
東京大学文科一類 2 年



王玲（オウ レイ）
東京大学文科一類 1 年
日本で生まれ育ちましたが両親は中国人で、中国語は日常会話程度なら話せます。



稲垣健太郎
東京大学文科三類 2 年
趣味は推理小説を読むことや、音楽鑑賞です。



米田まりな
東京大学経済学部 2 年



李綺鈺（リ キギョク）
南京大学日本語学科 4 年
広東省中山市生まれ、マカオ育ち。趣味は旅行、読書、音楽。



朱文倩（シュ ブンセイ）
南京大学日本語学科 4 年
趣味はピアノ、ギター、歌「中国民謡、ポップソング」、演説、料理、水泳など。



梁晨（リョウ シン）
南京大学日本語学科修士 2 年
今研究している課題は高齢化社会だ。趣味は読書、スケートなど。

一、調査内容を見つけるまでのプロセス

空間と記憶、と言われても特にパツと思いつくようなことはなかったので、各自でアイデアを持ち寄ることにした。その中の一案として、「風景を見たら我々は何かの思い出、あるいはイメージがあることに気づく。そういったものは文化によって一定の方向性があるのでは？」という案が出た。そこから少し発展させて、風景を写真という形を用いることで「切り取られた空間」として見立てた上で写真を日中の学生など様々な年齢層に見せ、それにまつわる記憶を引き出すことで何か面白いものが見えてくるのでは、ということを考えるにいたった。

二、空間と記録の定義、その関係に関する仮説

空間の定義：写真と言う手段によって切り取られた現実。夕日の写真、カップルの写真など。

記憶の定義：辞書どおりの意味。思い出すもの、覚えているもの。特に、空間と結びついているものを今回は対象とした。メンバーで集まって話し合った段階で、例えば夕日だったら青春とか思い出すよね、といった風になんらかの記憶と写真空間が結びつくことが体感で分かっていた。では、上手くトピックをえらべばそこで出てくる記憶が文化間によって異なるのではないか、ということ予測した。こういった文化間の相違について話し合うことは国際交流という場で非常に効果的だろう、と言うことも同時に考えていた。

三、調査内容

写真を見せ、日中から出た感想をまとめた。

（一）桜



共通：春、ロマンチック

日本のみ：入学式、卒業式、始まり、出会い、わかれ、花粉症
中国は9月始業なため出会いや別れはない。ただ、恋の季節なことはドラマの影響で共通らしい。

（二）クリスマスツリー

共通：商店街、プレゼント、雪、デート
日本のみ：ケーキ

ほとんど共通。ただし、中国では国民党時代はクリスマスが存在したものの、戦後からは無く、79年 改革開放以降再開。90年代に普及するため、若い人を中心に根付いた文化とのこと。



(三) 虹



共通：希望、切なく美しい、雨上がりの
特筆事項無し。

(四) マクドナルド



共通：ジャンクフード、体に悪い、たまり場、太る
日本：安い
中国：KFC、公衆トイレ
中国ではファストフード店が固まってファストフード街みたいなのを形成し、同じ客層を狙って競い合うらしい。あと日本ほど安くないため、お金持ちの子供が誕生日パーティーを開くときにマクドナルドを使うことがあるとか。公衆トイレは、中国の公衆トイレは紙が有料な上に汚いので、マクドナルドをトイレとして使うらしい。ただ、マクドナルド＝トイレの認識はいかかなものか（笑）

(五) スーツ

共通：広告、面接、就職活動
日本のみ：バイト、パーティー、おみあい、仕事など
中国のみ：残業する日系企業、私服の警察、政治家、ドラマ
中国では銀行員や社内でも地位の高い人、営業の人ぐらいしかスーツを着ないらしい。



日系企業だけは厳しいらしく、面接はしっかりしたスーツの必要があるらしいがほかはそこまでしっかりしていなくてもいいとのこと。日本ではバイトでもスーツが要求されるなど、公の場に出るときはスーツ、という認識。

(六) 筆



共通：小学校、伝統文化、知的

日本のみ：正月など

中国にも「春聯（chunlian）」という文化があり、赤い紙に黒い墨で書かれた文字を扉の左右と上に張り付ける文化があるらしい。この紙は字が上手い人に書いてもらったり、買ってきたりすることが多いらしく、筆で書かれた文字であるにもかかわらずそこから筆が思い出され、というのは面白い。日本で正月が出るのは学校で書き初めをしたりすることが多いからでしょう。

(七) 夕日



共通：寂しさ、大自然、生命、帰宅など

日本のみ：青春

中国のみ：老い、漁船

中国で青春が出なかったのは、写真のような風景というのはめったに見ることがなく、実体験と結びつきにくいから、と思われる。中国で老いが出たのは夕陽紅という言い回しがあるため。漁船は日が暮れ

ると揚子江（黄海？）から漁船は引き上げないといけなくなるため、らしい。

（八）寺



共通：静寂 坊主 仏教 和風 祈り

日本のみ：座禅、茶道、木魚など

日本の方が具体的な行為やものについての指摘が多かった。

（九）海



共通：夏、南国、開放感

日本のみ：やきそば、クラゲ、魚、ハワイなど

中国のみ：子供の心、知的、永遠に飽きない、心は流れない水のように、天国、モルディブ

日本の方が物質的なものを思い出し、中国は精神的な物に結びつける傾向が出た。中国では日本と比べ海と触れる機会が少なく、視覚体験のみに基づく記憶からの答えが多いためではないか、との推測。ハワイ、モルディブの違いは広報戦略の違いからの模様。

（十）高校生カップル

共通：青春、初恋、デート、駅

日本のみ：不貞、爆発（多数）、密会、渋谷

中国：児童に適しない（8歳）、兄と妹の深い愛情（43歳）

日本で爆発が多数出たのはリア充爆発しろ！というフレーズのせいと思われる。ただ、調査対象の多くが男女比4:1の東大でやったから、というもある。中国では幼い恋という指摘が多く、8歳でもカップルとわかるのはドラマの影響。43歳女性はドラマをあまり見ないため、制服からカップルに結びつかない。

様々な相違が出たが、それぞれ分類が可能であることに気づく。

1-4 相違ほぼなし

5-6 文化的相違

7-9 感覚的相違

2、10 年代的相違

軽く説明を加えておくと、7-9では日本人の方がより具体的な思い出を持っており、中国人はしばしば抽象的なイメージを思い出として挙げている。これはその風景がいかにも実体験に存在するか、ということと関連しており、たとえば海の場合、島国である日本では多くの人が実体験で海を知っているが、大陸にある中国は海に行ったことがない人が割と多いからだ、という結論が出た。

また、2と10では上でも説明したが、こういった調査を年代層別に分けて行うことで、文化が根付いた時代をある程度特定できるのではないか、という仮説を持つにいった。

四、調査報告

当初考えていた「記憶」と「空間」について、定義が大きく変わるといったようなことは見られなかった。ただ、当初予想していたよりも相違の方向性がある程度分類できたということは収穫だった。というのも、今回はチームメンバーからお題を募集し、いいと思ったものを投票で選んで決めるという、有り体に言うと適当な決め方をしたわけであるが、もしたとえば文化の根付いた時代について調べたい、という形で研究をしたい場合、ある程度その目的に沿って写真内容をセレクトすれば求めた結果が出やすいのではないかと考えられるからである。また、今回は3分類であったが、たとえば上記の目的の為に調査をして集計した場合、さらに細かい分類が生じることも考えられるし、また調査対象をより広範にすることでまた違った結果が出ることも十分ありうる。

記憶と空間についての関係に関しては前項で述べたとおりである。

五、異文化交流の決算一僕がLAPを通じて学んだこと一

さて、ここまで長々と筆を進めてきたわけですが、実はまだノルマの半分にも満たないという事実を驚きを隠せない（汗）南京大のみなさんそんなを書いてへんやん！・・・という突っ込みはさておき、最後の最後ということで2010年受け入れ、2011年南京集中講義、2011年受け入れと3回にわたる、LAPとの関わりにおいて僕が学んだことを書かせていただきたいと思います。

まず、僕がこの交流を通じて南京大の学生から受けた印象は、とにかく頭がいい、ということでした。特に2010の方々。日本語を学

び始めてから3～5年しかたっていないにもかかわらず、あの流暢な日本語。かたやこちらは8年間英語やってきたのにあんまり話せなくてごめんなさいと言いたくなります。また、その成長の早さにも驚くべきところがありました。というのも、2010年に東京にやってきた人の中でもやはり日本語の上手い下手があり(とはいっても下のラインがそこそこ高いのですが)、個人名を出して凄く申し訳ないのですがスーパーマンこと王超君は当時そんなに日本語がうまくなかった印象があります(ごめんね。)。たとえば、日本人にとって普通のペースで話していると理解が追いつけなかったり、簡単な日本語でもときどき意味がわからなかったり、等。しかしながらいざ2011年南京に行ってみると、凄くレベルアップしていて驚きました。普段の速度、かつ関西弁で話してもほぼ問題ないという驚異の成長度。さらに凄いことには笑いのセンスまで身につけ、王超君は名前通りスーパーマンになっていたのです。もちろん他の方々も、日本語のレベルもさることながら、外国語であるにもかかわらず頭の回転の速さを感じる会話の切り返しに、我々でも驚くような質問を教授に投げかける姿は流石と言わざるを得ませんでした。聞くとところによると、南京大の倍率は100倍を超えているそうです。

さらに、学生交流というと自国の学生とのかかわりも見逃せません。2010年、2011年集中講義は特に学年の幅が広く、また方向も様々な先輩方にお会いすることができ、とても衝撃を受けたのを覚えています。正直言って大学一年生は高校4年生みたいなものだと思うし、

僕自身がそうだったので、専門の勉強をしていて、真摯に学問に対して取り組む先輩たちの姿は印象的でした。

このようないろいろな人との出会いを経て、自分ももっと頑張らないとな、と思うようになりました。1年の3月半ばにして高校4年生から大学1年生になった、とでも表現するのがいいでしょうか。当時、LAPはプロジェクトとしては確かにしっかりした内容が定まっておらず、授業を受けて観光に行くという形がメインでしたが、それでも先輩方、そして南京大生を見て学問に対する姿勢を学べたということは僕にとって非常に大きな収穫だったと思います。

さて、ここまで昔の話をしてきたので次はちょっと昔の話をしましょう。つまり、2011年受け入れに関してです。今年は1,2年生中心で若さを生かした交流になったのではないのでしょうか。つまり、2010と比べると得たものの性質が変わったのではないかな、という印象です。がむしゃらさ、とでも表現しましょうか。少し若返ったような気がしました。今年から割と真面目な？プロジェクトになったように見受けられます。僕はもう第一線からは引退しますが、学生交流と言っても形は様々ですから、これからも色々とし行錯誤してより良い交流ができるようになっていけばいいな、と陰ながら応援しております。

最後に、お世話になった先生方、日本と中国の学生の皆様に。いろいろな考え方、個性をもった人々に会えることができて、とても幸せでした。機会があれば、ぜひともまたお会いしたいと思います。ありがとうございました。



茶室見学風景。



共同研究の内容で盛り上がっている学生たち。



南京大学の先生も茶室見学に参加（右から賀曉星先生、楊忠先生、葉琳先生。



共同研究発表会。

2011 年学生交流に混じりながら

渡辺雄一郎 (東京大学生命環境科学系教授)

2011 年 11 月 6 日 -11 月 13 日、駒場キャンパスに南京大学の学生を迎え、“南京大学 DAY” が催された。楊副学長、葉先生、賀先生、雷先生と学生 12 名をお迎えした。学期の真っ最中ですべての行程に私自身おつきあいできず、見えた部分のみの感想となることをお断りしておく。

竣工直後の 21KOMCEE のオープンスペースアリーナでは南京大学と東京大学の交流の写真などの展示を行うことが試された。最終のお別れ会と修了式がここで開かれたが、このような国際交流が日常的に行われることが期待される中、まさにふさわしい空間であると感じた。直接参加していない学生も周囲からそのグローバルな雰囲気をのぞくことができる環境ができたことを感じた。そしてその環境を、両大学の学生がうまく利用する端緒を築いてくれたと思う。天井が高い空間は、これからも交流が発展することを願うように、まだまだ伸び代があることを感じさせた。

今回、南京大学の学生と東京大学の学生が混成グループを組み、共同研究を進める形をとった。その研究成果の発表会が 11 日にもうけられ、その一部を聴くことができた。4 チームあって、アニメ・ジブリ、東京タワー、秋葉原など興味あるテーマを設定し、それから文献、インターネットなどによる調査、さらに現地に行って地元の方々に話を直接聞いて、その情報を増やして、成果をまとめていった。グループ分けは、来日前からある程度なされていて、南京大学の学生も興味あるテーマを設定した上での来日であったようで、当初から積極的な学生はかなり最初から行動的に調査、聞き取りなどを行ったようである。江戸東京たてもの園や、東京タワーに調査にいった学生の積極性がめだった。自分がそのような状況におかれて、中国の街中でいろいろと現地の人に話を聞く（仮に中国語に不自由しないとしても）という活動はなかなかできないであろう。南京大学の学生による想像以上の積極性をみることができ、東京大学の学生も得るものがあったと思う。東京タワーについての歴史、周辺の変遷を知る上で、増上寺の職員、料理店の女将、環境協会スタッフに話をきき、そのインタビュー内容をまとめるという手際の良さには舌を巻いた。

サポートする側にも、事前に学生がどのようなテーマ設定を

知ることができれば、今回のように運悪くジブリ美術館の休館にぶつかることなどを回避して初志貫徹することをサポートできたかもしれない。相互訪問前、事前のやりとり（メールなど）、そして受け入れ側の最小限準備も伴えば、一週間弱でも一層有意義な滞在、そして活動ができる可能性を感じた。

大学教育において、今回のような学生交流と共同研究が行われることは、規模は現状の数十人程度であっても、密度の濃い人的交流を築くことができ、次世代を担う両者が長いスパンでの人間理解に立脚した交流を継続していけるきずなを構築できると考える。南京大学の学生が日本語学科の学生で、現時点では先方の語学力にかなり依存している。日本語を選択している段階で、親目的なところが事前にあるわけである。とはいえ、千年以上の交流の歴史があるといえる両国の若者が、それぞれに歴史を知った上で、「昔は。。」といいつつ、日中だからこそわかる会話、話題があることは、非常に貴重である。「儒教」と言ったら、当然であるが相互にわかっていて、意味の説明がいらない。精神的な土台にかなりの共通性を感じる交流は、欧米人と語り合うこととは大きく異なるであろう。グローバル化という時代だからこそ、こうした交流から生で感じることを、考えることを、これまでに学んだことと結びつけて今後も経験してほしい。

何人かの南京大学の学生さんには私の研究室にきてもらって、鍋を囲んでの歓迎会も開いた。日本的な歓待、そして徐々に周辺の学生が集まってくる雰囲気を喜んでもらえたと思う。中国の学生に身近にきてもらって、理系の学生も構える必要はなく、おれたちと同じじゃないかという感想を持ったと思う。自由時間を両大学学生同士が都内で過ごした最後の日の夕飯につきあったとき、将来どうするかを両者が話をしているのを聴いていた時も、彼は東大、彼女は南京大学という違いよりは、両者の考えや議論にむしろ世代の共通性の方を強く感じた。日本語を勉強したけれどやはり将来アメリカに行きたいという女子学生もいて、少しがっかりしたが、逆に言うところまで気をゆるして語り合う場面に遭遇できたということは、むしろ貴重なときを過ごしたともいえる。彼らがまた相互交流も含めて、次回は東大生が南京の方に訪問するチャンスを生かして、更なる発見、意見交換ができることを期待したい。

共同研究の発表を受けて

渡邊正男（東京大学史料編纂所准教授）

LAPでは、一昨年度から東京大学・南京大学の学生交流プログラムを実施しているが、2011年度「東京大学一週間プログラム」の一環として、初めて「共同研究ワークショップ」を企画した。その成果発表会に参加する機会を得たので、概要を紹介するとともに、若干の感想を述べてみたい。

同ワークショップは、南京大学日本語学科から招いた学生12名と東京大学の学生20名とを四つのグループに分け、「空間と記憶」という統一テーマについて共同研究を行うものである。テーマの解釈から始めて、具体的に対象を絞り込み、インタビューや写真・ビデオ撮影等による資料の調査・収集を実施し、それに基づいた議論・検討を経て成果をまとめ、最終的に各グループの研究発表と相互の討論とを行った。

各グループによる成果の概要は次の通りである。

グループ1「有形な空間と無定型の空間における記憶」

バーチャルな空間であるアニメーション「となりのトトロ」、リアルな空間である「江戸東京たてもの園」、両者に共通して感じる「懐かしさ」と記憶との関係を検討し、実体験そのものの記憶のみでなく、記憶となんらかの相似性を有する対象に触れることによって「懐かしさ」が喚起されるとした。

グループ2「都市シンボルのイメージ・空間・記憶」

「東京タワー」という空間について、日常的に接している日本人の持っているイメージ・記憶をインタビューによって明らかにするとともに、ドラマ等の情報のみに基づく南京大学生のイメージが、実際に訪問したことによってどのように変化したかを跡付け、報告した。

グループ3「空間の記憶・記憶の空間」

日本人の神社をめぐる空間と記憶について、主に明治神宮参拝者のインタビューを通して検討し、空間の意味づけには、個別の記憶によって差異が生ずる側面（「空間の記憶」）と、知識としての記憶によって共有される側面（「記憶の空間」）とがあるとした。

グループ4「記憶の反映と相違」

写真を「切り取られた空間」と捉え、夕日・海・スーツ等10点の写真について、それがどのような記憶と結びつくか、日中両国でインタビューを実施、その相違を比較・検討し、個人の体験や文化的背景が深く関係しているとした。

南京大学学生の日程を見ると、共同研究のために使えた時間は実質一日半と極めて短い。東京大学の学生も、通常の授



学生の討論に積極的にアドバイスした渡邊正男先生（右二）。

業やアルバイトのため、十分な時間がとれたとは思えない。にもかかわらず、抽象的なテーマを具体化、調査に基づいて議論・検討し、それなりのかたちにとりまとめたことは高く評価すべきであり、テーマの掘り下げ、結論のとりまとめに拙さは否めないものの、企画としては一定の成功を収めたと言えよう。また、日本語によるインタビューを実施した南京大学学生の語学力・コミュニケーション能力には目を見張るものがあり、深夜まで準備のための討論を行うなどした東京大学学生の努力も賞賛に値する。

一方で、「東京大学が積み上げてきたリベラルアーツ教育の蓄積を南京大学の皆さんにも是非知っていただきたい」という趣旨からすると、いささか疑問に感じざるを得ない点もある。LAP事務局を除く東京大学教員の参加が充分とはいえず、研究発表会にも、通して出席した教養学部所属教員はなく、教育という要素は希薄であった。

プログラム全体を見ても、冒頭のレセプションにこそ多くの教員の参加があったが、打ち上げの懇親会への参加者はほとんどないという状態で、管見の及ぶ限り、学生間の交流が極めて良好であったのに比して、学生と教員との交流はごく限られたものであった。外部から本プログラムに関係する機会を与えられ、両大学学生諸君の本プログラムに対する熱意と期待に多少なりとも触れることができた者にとっては、大変残念であると言わざるを得ない。

日常的授業・業務等の多忙を理由とすることは簡単であるが、それ故にこそ、着実な成果を蓄積してきた本プログラムを、今後も維持・発展させていくためには、教養学部、ひいては東京大学全体としてのLAPの位置付け、体制的な配慮・援助が一層必要となるであろう。



増上寺



赤羽

「東京大学1週間体験」は有り難いプログラムだと感じた。この活動に参加できて、いろいろ勉強になった。参加する前と後で、いくつかの変化があるのも気づいた。

1. 日本語と日本文化にもっと親しむようになること

日本語を勉強して、日本についての知識は本の中で読んだが、今度は自分の目で見て、身をもって感じることによって、もっと日本語と日本文化に興味を持つようになった。日本語がうまく話せれば、日本の方と流暢に交流することもできる。コミュニケーションは非常に重要だと感じる。言葉を通して、自分自身の意思とか考えとか話し合える。これは両国の文化や交流に役立つと思う。

2. 東京大学についてのイメージの変化

東京大学はアジアでランキング NO.1 の大学なので、東大での勉強はきっと大変だろうと思っていたのだが、駒場キャンパスを一周回したら、多くの学生が部活に忙しい姿が印象深い。活力いっぱい学生達をみると、感心した。勉強と部活を両立させるのは素晴らしいことだと思う。また、本郷キャンパスの図書館はほんとうに立派な建物だと感じる。

3. 教養学部についての理解

中国でも「通識教育」を行なっている。これは「教養教育」の概念と似ている感じがする。しかし、「通識教育」を受けたことがなかったたので、その概念がはっきりわからなかった。「リベラルアーツ」を巡った特別講義を伺ってから、教養教育の理念と目標がわかるようになった。現代の学生にとって、「部分的専門的知識の基礎としての一般教養の取得」「人間としてかたよらない知識」「どこまでも伸びてゆく真理探求の精神」は非常に重要なポイントだと考えている。この思想はきっとこれからの勉強に役立てるだろうと思う。

4. 茶道体験

それまでは、茶道はただ本の中での知識しかなかった。茶道についての理解はそんなに深くなかったのである。今度、日本の茶道文化を体験することによって、茶道についての感触が一層深くなった。知識がいきいきな体験に変じた。これは忘がたい体験である。「一期一会」という考えをもって、どんなことも、どんな人も人生の大切な体験だと感じられるようになった。

東京大学での一週間体験は確かに人生の勉強になった。いろいろな感触が身にしみた。このような機会は本当にありがたいチャンスだ。これからも多くの交流を通して、中日両国がお互いにもっと理解できるように心から願う。

今度の共同研究に参加して本当に良かったと思う。「寂しさに耐えないと立派な研究者になれない」とよく言われるが、二年の修士勉強をして、研究ということは本当にさびしいことだと思っている。何も考え出さなくて、途方に暮れたときは本当にさびしいと思う。しかし、今度の共同研究は本当に楽しかった。みんなで一緒に討論や相談して、視野はだんだん広がってきて、新しいアイデアもどんどん出てきて、そして、最後に一緒に討論出した結果をみんなの前で発表して、先生方やほかのチームのメンバーの意見を聞いて、本当にいい勉強になった。これからも楽しく研究できるようになるかもしれないと思う。そして、現場調査の体験も素晴らしかった。実際にインタビューして、自分が望んでいる結果といろいろあたりやずれ違いもあるが、それが自分の研究をもう一方進ませることができると思う。

王香梅

今回のプログラムについて、上述の点の以外に、また一つ非常に残念な思いが残っています。共同研究をするには、時間がちょっと短すぎるかもしれません。そして、東大学生さんたちはみんな自分の余暇を利用して今回の共同研究に参加したので、時間にもきつくて、全身的に力を込めるのもなかなか難しいです。共同研究として、もっとまとまった結論を出すには、一緒に検討する時間ももっと長くしたほうがいいではないでしょうかと思っています。ちょっと粗探しをしているような感じがしますが、ただせっかくのチャンスだからもっと様になる結論を出したいです。

唐菊芳

私は小さい頃から、日本文化に触れはじめました。日本のアニメーションとか、ドラマとか、小説とか、音楽などが大好きです。そのとき、日本語はまだ分かっていなかったが、言葉の美しさとやさしさが感じられました。だから、大学で日本語を勉強することを決めました。入学以来、日本語の勉強が三年になりました。そのうち、日本語をだんだん身につけるとともに、日本文化と歴史をもっと分かってきました。日本文化に触れれば触れるほど、興味が深くなりました。そして、私は日本に行って、日本人の生活を自分の身で体験してみたいと思いました。また、日本人との付き合い、日本学生との交流を通じて、日本語が上手になりたい、日本文化をもっと理解したいと思っています。

日本は中国の一衣帯水の隣国であり、昔から文化や教育や経済などの交流が盛んでいました。そして、日本の大学教育の目的は、知識のみならず、人格面とともに応用能力も十分に開発することであるそうです。だから、いつかから日本の大学で勉強したいと思っています。

中国と日本は昔からの友好的な隣国同士で、交際の歴史も二千年続いています。交流の広さ及び相互依存度・相互関心度の高さは中日両国の国民感情の改善、さらに国交の改善にも有利なのだと思います。このプログラムは中日両方の学生の交流を促し、お互いに理解を深めることができると思います。中日友好は一目で見れば大きい課題だが、われわれ日本語を勉強している学生が実に小さいながら不可欠な要素です。これから、このような中日交流の活動がもっと多くなる必要があります。そして、「東京大学1週間体験プログラム」このようなプログラムがこれから毎年続けて欲しいです。

李琦钰

東京大学1週間体験プログラムに参加して、私ははじめて日本に行った。その前に、日本語を勉強してもう5年間となった私は日本に行ったことがないが、授業を受けたり日本人と交流したりして、日本に対するイメージがまだ熟成していなかったが、頭の中にすでに形成されたと思う。今回はようやく自分の目でそれを確かめる機会が私に与えられたのである。

きれいなまち、礼儀が正しい人たち、忙しいサラリーマン、読書が好きな日本人、それを見ると、本当だなと心の中に思っていた。しかも、ドラマのシーンと同じように、走っている電車、子供が遊んでいた公園、たびたび聞こえたカラスの鳴き声、実際にはじめて見た景色であったが、妙になつかしい気分であった。もちろん、予想以外のことも度々あったのである。以前は、電車や地下鉄において日本人が読書したり携帯を見たりして、喋らないのは一般的なのであったが、私が見るかぎりには、けっこう雑談していた。それに、街に大声で口喧嘩をやった人もいて、やはりどの国でもそういう人があるのだと思った。

さらに、昔はかなり理解しにくいことは今回の見学を通じて、実感したのであった。よく日本の方に中国は広いと言われたが、あまり感じなかった。しかし、実際に日本のまちを見て、中国には4車道が普通なのであったが、日本にはほとんどなかったのがあった。それこそ、島国と大陸との違いだろうと実感した。

馬歩雲

中国の大学でのサークル活動はそんなに面白いと思いました。中国の大学生のサークル活動は時々功利的なものですから、皆は参加する本当の意味を失ってしまうことが多いです。

この機会をきっかけで、東大の学生たちと一緒に授業を受けることができました。先生の授業は本当に面白かったが、私の今の程度から見れば、全部聞き取ることができませんでした。もっと勉強したくなりました。

多くの中国の大学生は私のように、未来の道はどのように選んだほうがいいのかとよく分かりませんでした。今度の機会を通して、自分の人生とか、日本に関する感情とかは変わっていきます。

李艶

いろいろな期待と疑問を持って、羽田空港に到着しました。近藤さんはわざわざ迎えに来てくれて、とても親切で、いろいろなことを詳しく説明しました。本当に嬉しかった。それから、ホテルに行って、荷物を置いて、茶道体験に行った。もともとは茶道は中国から伝わってきたものだが、でも中国に茶道の作法を見ることがあまりないので、初めて、こんな複雑な作法を見ると心がびびりした。まずは、懐石料理だ。外形だけでは素晴らしいと思った。茶道先生と喋りながら、おいしい料理を味わった。それから、茶室に移動して、茶道の行事を行った。初めてそんな正式な行事を見て、いろいろ勉強になった。

また、一番楽しかったのは東大生との交流だった。東大の学生は活気のあるれて、自分の意見を十分に表した。私たちのグループ2のメンバーが共同研究に対して、和館にいろいろな討論を行って、そして東京建物園に見学して、記憶と空間の関係を一生懸命探求した。皆の努力をおかげで、発表はとても成功した。木曜日の東京都内観光、東大の学生は私たちを連れて、明治神社・上野・秋葉原・銀座などたくさんのところに遊んでいた。とても楽しかった、日本はきれいだと思った。今回のプロジェクトを通して、日本に関する認識や感情が変わっていった。とてもいいイメージを残った。もしチャンスがあれば、もう一度日本に行って、深く体験しようと思う。このようなプログラムを続けてほしい。中日の青年たちの交流をもっと多く行ってほしい。

楊菲



私東北地区に生まれて、18年間ずっと遼寧省に住んでいます。周りの人はみんなおおらかで、豪快な人だと思っています。大学をきっかけにして、中国南方へ行きました。初めて南京に来た時、慣れなかったことがいっぱいあります、例えば、クラスメートとの交流とか、食べ物とか、学校の寮にすむため、生活習慣の上にも慣れなかったことがあります。日を経つに連れて、自分自身から問題の原因と解決方法を考えて、まとめるようになりました。気候及び生活習慣によって、人と人の付き合いが違います。そして、皆一人っ子だし、わがままとエゴイズムのところもあります。私自身もそうだと気付きました。そして日本語を勉強する間、日本人の生活、風俗習慣、礼儀などの問題に触れ、いろいろ勉強になりました。これらによってどのように人と付き合えばいいかと分かり始めました。

今回のチャンスのおかげで、憧れる日本に行きました。日本の町、道路、建物、地下鉄、コンビニ、売り場など自分の目で見ました。日本はうわさのように綺麗な国であり、サービス業の人も確かに丁寧な方です。それ以外に、東京大学の学生たちも交流しました。日本学生たちの活発、真面目、独立なところが目の当たりにしました。今年私4年生で、もうそろそろ卒業する予定ですが、なんだかもう一度大学生活を送りたいなあと思ひ始めます。真面目に、勤勉に大学生活を送りたいです。

東京はもちろん、南京も18歳以前の私にとっては遥かな世界であります。3年間ほど南京に住んでも、世界はきれいだと思わないです。なぜなら、苦しいことがあるからです。でも、今は私にとって、世界はうつつくしいものであります。なぜなら、ある俗語で言えば「可愛い子には旅をさせよ」です。旅に出ると、困難にあえるのは当然ですが、難しいことがあったら、美しいものがより美しくなり、体験したことによって、人はいいことを身に付けるからです。

李瑩瑩



意見としては二つあります。まずは、議論が少なかったです。この度、東京大学のほうがすごく面白いテーマを提供してくださったのに、東大生が授業かバイトか来られなかったり、南大生が講演を受けることなどで出席できなかったり、結局本チームでは議論が二回しかなかったです。せっかくの交流プログラムですが、交流が多くできなかったのが残念だったと思います。また、この一週間、親切に同行してくださったボランティアの東大生に大変ご迷惑をおかけしました。みんなはかなり疲れたと思います。結局、都内見学の時は、東大生の疲れを遠慮して行きたかったところが言えなくなりました。実は、南大生がみな日本語専攻だから、交流以外の場合は同行しなくてもいいと思います。(安全を考えれば、女性の場合は別)

徐海強

時間矢の如く、東大交流訪問の一週間は皆の歓声の中で、思うよりも早く過ぎました。人間として初めての海外旅行、日本語を学ぶ学生として初めての日本生活体験、いろんな人に出会って、今までテレビでだけ見ていたことを経験し、本当にいい勉強になりました。と同時に、計り知れぬほど多くの思い出や感動も心の底に残り、一生の宝物になりました。

きれいな国そして親切な国民、これは一週間の日本生活体験後、私の日本に対するイメージです。東京に着いた最初の日に、町にはゴミ箱がほとんどないということに気付きました。しかしながら、道にはゴミ一つも捨てられていないのにびっくりさせられました。道を歩く人々のゴミはどこに捨てただろうとずっと考えていました。そして日本サービス業の親切さを初めてこの身をもって実感しました。どこへ行っても笑顔で扱われて時折買わなければ店員には済まない気がしてたまらなくなります～

陳建旺

参加者の声 東京大学学生

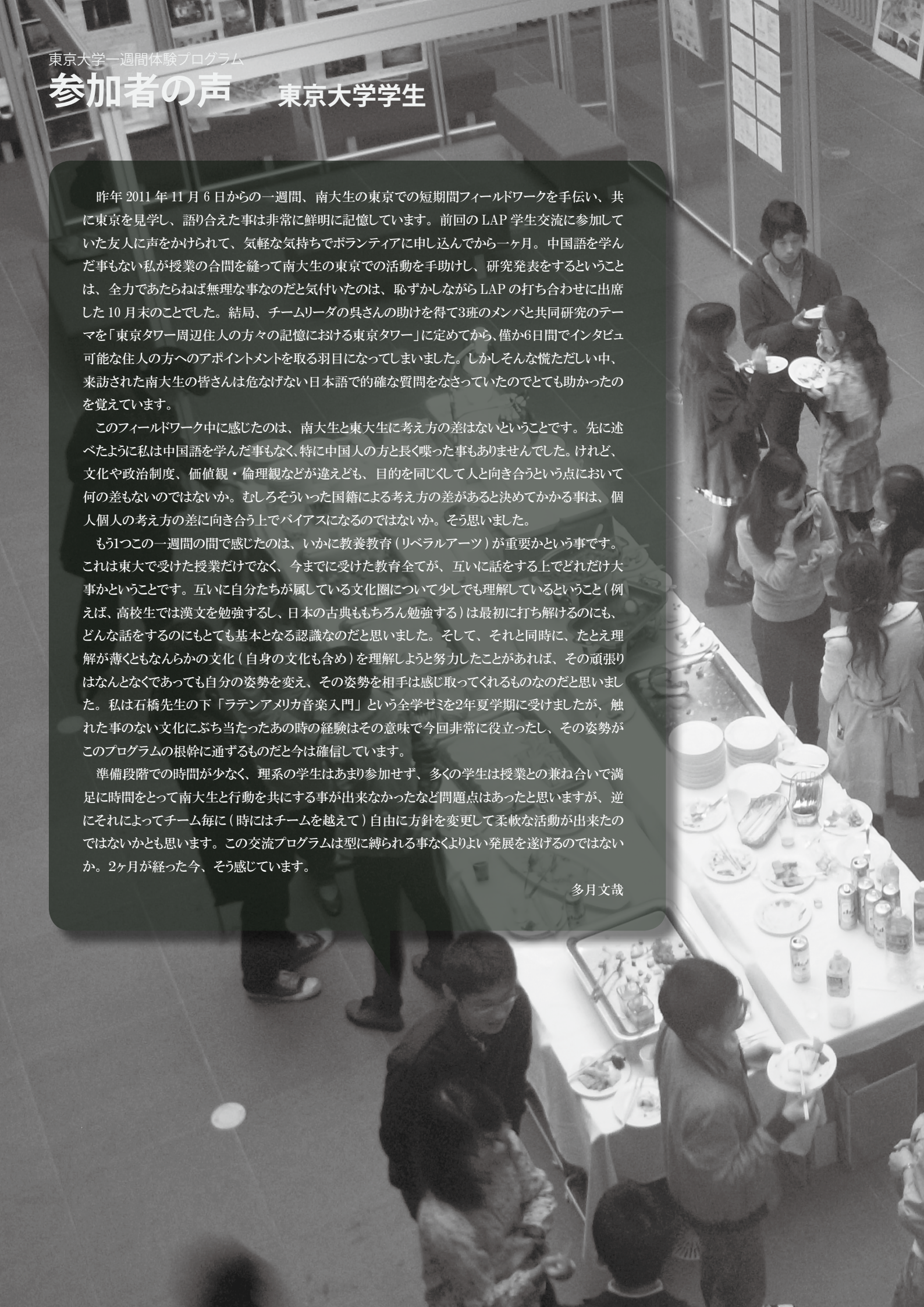
昨年 2011 年 11 月 6 日からの一週間、南大生の東京での短期間フィールドワークを手伝い、共に東京を見学し、語り合えた事は非常に鮮明に記憶しています。前回の LAP 学生交流に参加していた友人に声をかけられて、気軽な気持ちでボランティアに申し込んでから一ヶ月。中国語を学んだ事もない私が授業の合間を縫って南大生の東京での活動を助けし、研究発表をするということは、全力であたらねば無理な事なのだと気付いたのは、恥ずかしながら LAP の打ち合わせに出席した 10 月末のことでした。結局、チームリーダーの呉さんの助けを得て3班のメンバと共同研究のテーマを「東京タワー周辺住人の方々の記憶における東京タワー」に定めてから、僅か6日間でインタビュー可能な住人の方へのアポイントメントを取る羽目になってしまいました。しかしそんな慌ただしい中、来訪された南大生の皆さんは危なげない日本語での確な質問をなさっていたのでとても助かったのを覚えています。

このフィールドワーク中に感じたのは、南大生と東大生に考え方の差はないということです。先に述べたように私は中国語を学んだ事もなく、特に中国人の方と長く喋った事もありませんでした。けれど、文化や政治制度、価値観・倫理観などが違えども、目的を同じくして人と向き合うという点において何の差もないのではないか。むしろそういった国籍による考え方の差があると決めてかかる事は、個人個人の考え方の差に向き合う上でバイアスになるのではないかと。そう思いました。

もう1つこの一週間の間で感じたのは、いかに教養教育（リベラルアーツ）が重要かという事です。これは東大で受けた授業だけでなく、今までに受けた教育全てが、互いに話をする上でどれだけ大事かということです。互いに自分たちが属している文化圏について少しでも理解しているということ（例えば、高校生では漢文を勉強するし、日本の古典ももちろん勉強する）は最初に打ち解けるのにも、どんな話をするのにもとても基本となる認識なのだと思います。そして、それと同時に、たとえ理解が薄くともなんらかの文化（自身の文化も含め）を理解しようと努力したことがあれば、その頑張りはなんとなくであっても自分の姿勢を変え、その姿勢を相手は感じ取ってくれるものなのだと思います。私は石橋先生の下「ラテンアメリカ音楽入門」という全学ゼミを2年夏学期に受けましたが、触れた事のない文化にぶち当たったあの時の経験はその意味で今回非常に役立ったし、その姿勢がこのプログラムの根幹に通ずるものだと今は確信しています。

準備段階での時間が少なく、理系の学生はあまり参加せず、多くの学生は授業との兼ね合いで満足に時間をとって南大生と行動を共にする事が出来なかったなど問題点はあったと思いますが、逆にそれによってチーム毎に（時にはチームを越えて）自由に方針を変更して柔軟な活動が出来たのではないかと思います。この交流プログラムは型に縛られる事なくよりよい発展を遂げるのではないかと。2ヶ月が経った今、そう感じています。

多月文哉



今回参加した南京大学の学生との交流プログラムは主に「記憶と空間」というテーマで両大学の学生が共同研究を行うことが核におかれているものでした。東大の学生側がどのような共同研究を行うかの大枠を考え、南京大学側に伝えてお互いに準備を行いました。私の班では、日本と中国の様々な年齢層の人にそれぞれ同じ写真を見せ、その写真から連想するイメージや言葉を答えてもらい、両国間での共通性や差異を考察、分析することで両国間の文化、慣習の違いや、国民性の違いを帰納的に導き出し、「記憶と空間」の関係を具体的に示そうと考えました。

この共同研究を行うにあたって、特定の先生の講義が役に立ったという意識は持ちませんでしたが、基礎演習の授業などで培った自分でテーマを設定し、研究の内容を考え、それを発表の形にまで持っていく能力は生かされたように思います。また、私の班には文系の学生しかいなかったこともあり、もし理系の学生がいればまた面白い化学反応が起きたのではないかと若干残念に思う部分もありました。

南京大学の学生の方々から日本に到着した後、親睦を深めつつ皆でインタビュー結果の分析を行ったのですが、それは非常に興味深いものでした。面白いくらいに共通したイメージを抱く写真もあれば、全く異なるベクトルの回答が得られた写真もあり、結果に驚かされると同時に、そのような結果が生み出された経緯を論理的に推測していく過程が面白かったです。東大生、南大生で今まで生きてきた環境や文化・慣習が大きく異なっているにも関わらず、面白いくらいに似たような回答が多数得られたり、写真を提示した我々の意図を超える部分に注目した回答が得られたりする中、南京大学の引率の教授先生も交えて白熱したディスカッションを出来たことは私にとって非常に貴重な経験となりました。実際には時間が非常に限られていたこともあり、心行くまで考察できたとはとても言えませんが、限られた時間の中ではある程度の結論を持った発表を行えてよかったと思っています。

もちろん、自分の班で発表準備を行う過程も非常に有意義でしたが、ほかの班の、自分たちとは着目点の全く違う発表を聞いたことも個人的には興味深かったです。私たちの班ではフィールドワークはそこまで必要がなかったため、他の班の、様々な場所でのフィールドワークを経て作り上げた、より実感のこもった発表は刺激的でもありました。

また、学術的な活動に限らず、レセプションや打ち上げの場において、同年代の仲間として南京大学の皆さんと多岐にわたるお話をできたのも非常に楽しかったです。学校生活の話、将来の展望、一番大事にしているもの、結婚観や恋愛観などを互いに交流し合えたことは非常に有意義でしたし、自分にとっても視野を広げ、自分を客観視するいい機会となりました。これまでにどのような文化環境の中でどのような経験を重ねたかによって、ものの見方も大きく変わるのだと改めて実感させられました。最終日に東京観光と称して班で築地市場、上野恩賜公園、アメ横などを一緒に歩いたのですが、私達が日頃何気なく見ている風景も、彼女（彼）たちからすれば新鮮なものであったり、逆に懐古的であったりして、南京大学のみなさんの感想を聞いていて改めて気づかされることも多かったですし、見慣れた風景から先入観が取り除かれたことでいつもと違って見えたりして、新たな発見も多く、観光につれていっているとはいえ、私自身も新たな視点で見る東京を満喫できたように思います。

王玲

学生交流の一つの目玉が、南京大生と行う共同研究であった。テーマは「空間と記憶」、誰でもいいがインタビューを行い、発表まで行うというのが条件だった。この共同研究は、私が予想していたよりもずっと難しかった。まず、具体的なテーマとして何を設定すればよいか、それを決めるのにかなりの時間がかかった。もともと共同研究にかけられる時間は3日程度しかなく、東大生も南京大生も授業や講演会、都内の見学など様々な他の予定が入っていたため、短い時間で発表にまでもっていけるようなテーマを、「記憶と空間」という大きな題材とつなげた形でアイデアを出すのは簡単ではなかった。実際、最初は「駒場キャンパスの記憶と空間」というテーマで駒場の歴史や建物などを題材に研究を進めていこうと考えていたのだが、インタビュー対象が決まらなかったことや南京大生が興味を持って取り組めるのかといった疑問などから行き詰まり、LAPの先生方にもいろいろと意見を出してもらいながら、結局「日本の神社の記憶と空間」というテーマに決定した。これが決定したのは南京大生が日本に到着し、東大でレセプションパーティがあった日の夜遅くで、本当にギリギリのタイミングだった。

しかし今振り返ってみると、この共同研究のテーマ設定に苦しんだのは、やっていることがそれだけ高度なことだったからで、当然だったのかもしれない、とも思う。私たちが行っていたことは、非常に大きなテーマだけが与えられた状況の中、自分たちで問題設定を行い、インタビュー対象やフィールドワークを行う場所を決め、研究を行い、発表するという一連のプロセスであり、学部の卒業研究や大学院で行っていることを「ミニ体験」していたともいえると思う。もちろん時間の短さや議論の深まりなどを考えると「研究」と胸を張って言うのはおこがましい気もするが、私自身は高校時代や大学の夏学期にとった授業ではこうした研究のプロセスを経験したことがなかった。私がとった授業がたまたまそうなのかも知れないが、夏学期にとった授業はどちらかというと「受け身」的で、この共同研究はもっと積極的な関わりが求められた分、新鮮でもあり、だからこそ難しかった。余談になるが、私が今冬学期に受講しているALESSという英語の授業はこの共同研究と似た要素が多くあるように思う。ALESSは一学期間をかけて英語で科学論文を書くという授業であり、身の回りのことを題材に自分でテーマを決め、実験を行い、論文にし、発表まで行う。与えられたことをこなしたり、調べたりするのではなく、自分でテーマを決め、論文や発表という形にまでつなげるということは、前者に比べてはるかに難しく、いろいろな能力が必要とされることなのだと、ALESSや今回の共同研究を通じて身を持って学んだように思う。

私たちのグループでは「日本の神社と空間」というテーマのもと、明治神宮と渋谷近くの小さな神社に出かけ、明治神宮では参拝客の人にインタビューをし、神社の思い出やどんなときに神社に来るかなどを聞いて回った。南京大生の人は修士課程の人も多く、研究の進め方については南京大生から様々なことを私たちも学んだ。他のグループも私たちとは全く異なるテーマや手法で研究を行っており、「記憶と空間」にアプローチしていた。発表では各班の違いはもちろんだが、最終的に至った結論には共通点も数多く見つけ、非常に面白い結果となった。

前田健太郎

交流の10年目を迎えて 東京大学・南京大学

南京 DAY
in 東京大学



2004



2005



2006



2007



2008



2008



2009



2010



2011



2011

概要

東京大学・南京大学交流の歴史

東京大学と南京大学の交流は、2001 年の「中日文化研究センター（中日文化研究中心）」設置にさかのぼる。翌年、佐々木毅総長がアジアの大学の代表として、南京大学創立 100 周年式典で講演された。2004 年、両校の交流を深める拠点として「東京大学リベラルアーツ南京交流センター（東京大学教養教育南京交流中心）」が設立され（写真 1.）、中国人スタッフが常駐し、日本から寄付された書籍の貸し出しなどが行われている。2005 年、東京大学教養学部では、教養学部が長年培ってきたリベラルアーツ教育を、中国を含む東アジア各地で普及させることを目的として、東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（East Asia Liberal Arts Initiative, EALAI）を開始した。その後 EALAI と南京大学が提携し、2005 年、リベラルアーツ教育フォーラムを開催し、2006 年から 2009 年まで毎年、表象文化論集中講義を実施した。

2005 年のリベラルアーツ教育フォーラムでは南京大学、清華大学、北京大学、東京大学の各大学教員が教養教育について講演し（写真 2.）、南京大学と東京大学で模擬授業が行われた。2006 年はプレイベントとして「能楽ワークショップ」を開催し、東京大学総合文化研究科教員 7 名が表象文化論集中講義を開講した。こうしたプログラム内容に対して、「これはリベラルアーツか、それとも表象文化論か」という集中講義の位置づけに関する問題や、授業形式のあり方について多くの意見が寄せられた。2007 年度は前年度の経験を踏まえた上で、第 2 回表象文化論集中講義を実施した。なお 2007 年度より集中講義が南京大学の単位認定科目に指定されている。2008 年度は、集中講義開催以外に教養

教育用テキストの出版も検討し、インターネット中継による講義も試みた。2009 年度には、EALAI の中国関連プログラムを独立させ、リベラルアーツ・プロジェクト（Liberal Arts Program, LAP）を発足させた。LAP は EALAI で蓄積した集中講義の経験を継承し、よりリベラルアーツ教育を重視する交流プログラムを目指している。LAP はリベラルアーツの特徴の一つである「文理融合」の集中講義を企画し、2009 年度は『身体論』、2010 年度は『記憶と記録』、そして 2011 年度は『変容』というテーマの講義を実施した。

また、2010 年度から新規事業として、学生の相互交流プログラムを導入した。毎年 3 月には東大生 10 名を南京大学へ派遣して集中講義に参加してもらい、11 月には南大生を東大に迎え一週間体験プログラムを体験してもらっている。2011 年度もこの方針を継続して学生交流を実施した。

南京 DAY in 東京大学

今年度は南京大学と東京大学の交流の 10 年目を記念して、通常の学生交流「東京大学一週間体験プログラム」に加えて、11 月 6 日から 13 日にかけて「南京 DAY in 東京大学」を同時開催した。「南京 DAY in 東京大学」では 10 年間の交流内容を紹介した展覧会、南京大学教員による連続講演会、及び日本語教育に関する教員座談会を開催した。この「教員間交流」は初めての試みであり、東京大学と南京大学の交流に更に新しい方向性を示したといえよう。以下は「南京 DAY in 東京大学」の内容の記録である。

東京大学・南京大学リベラルアーツ教育交流年表

2001	南京大が「中日文化研究センター」を設置、蓮實重彦・前東大総長が名誉創設者に就任。
2002	南京大創立 100 周年式典で、佐々木毅・東大総長がアジアの大学を代表して講演。
2004	東京大が教養教育フォーラムを南京大で開催、海外拠点「東京大学リベラルアーツ南京交流センター」を設置。
2005	EALAI プログラムスタート。古田元夫・副学長、木畑洋一・教養学部長、南京市教育フォーラムに参加。
2006	表象文化論・集中講義を南京大で開催。「能楽ワークショップ」（観世流・関根祥六、祥人）を開催。
2007	表象文化論・集中講義、南京大の単位認定の正式科目となる。
2008	表象文化論・集中講義、インターネットによる講義中継を実験。小島憲道・教養学部長の講演会を開催。
2009	LAP プログラムスタート。表象文化論・集中講義、インターネットを使った予習システムを導入。「坂東玉三郎講演会」を開催。山影進・教養学部長の講演会を南京大の仙林新キャンパスで開催。
2010	身体論・集中講義。プレ講演を南京大へインターネット中継。東京大学学生 10 名が南京大学集中講義に参加、学生討論及び交流を実施。
2011	記憶と記録・集中講義。東大生 12 名を集中講義に派遣、8 名は 3.11 地震の影響で、東大で講義を受講。南京大へはインターネット中継を行った。南京大生 12 名、教員 3 名及び楊忠副学長を迎え、一週間体験プログラム及び「南京 DAY」を開催。

1	2	1. 東京大学リベラルアーツ南京交流センター」の前で記念撮影する刈間文俊先生（2004 年）2. 教養教育について講演される南京大学副学長張興實先生（2005 年）3. 南京見学中の先生と学生たち（2006 年）4. 授業中に質問をする南大生（2007 年）5. 集中講義の風景。授業中は日本語が分からない学生でも同時通訳を通して講義を受けることが可能（2008 年）6. 日本とフランスの演劇について語るドウ・ヴォ・バトリック先生（2008 年）7. 講義中の田中純先生（2009 年）8. 東京大学で行われる学生交流の討論風景（2010 年）9. 集中講義中、通訳を担当した南大生と授業内容を確認する廣瀬通孝先生（左一）（2011 年）10. 「南京 DAY in 東京大学」のオープンセレモニーでスピーチする南京大学副学長楊忠先生（2011 年）
3	4	
5	6	
7	8	
9	10	

特別記念講演

南 京大学と東京大学の交流は、今年で 10 年目となった。東京大学の教養教育を海外に発信する最初の事業として、東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP) は、南京大学にて毎年集中講義を実施してきた。一昨年から、学生交流プログラムを開始し、相互交流を一層深めている。2011 年は両校の交流 10 周年を記念して、南京大学より楊忠副学長、葉琳教授、賀曉星准教授を迎え、中国における最先端の研究成果について講演を行い、また、「東京大学—南京大学交流のこれまで」の展示を、理想の教育棟アリーナにて行った。

特別記念講演 1.

中国式管理の変遷と探索

楊忠 YUNG Zhong

1963 年 9 月生まれ、管理学博士。現在は南京大学工商管理学部教授、博士課程指導教官、南京大学副学長。

ハーバード大学、エール大学などでの留学、研修の経験を持ち、組織行動理論、多国籍企業経営管理と高等教育管理などを専攻。『管理学』などの国家ブランド講義を担当。著書に『組織行動学：中国文化の視覚』『多国籍企業の合併企業支配メカニズム研究』ほか多数。『管理世界』『経済研究』など学術誌に 80 本あまりの論文を発表。国家自然科学基金の研究プロジェクト「多国籍企業親子会社内部の知的財産の流動、共有と創新のメカニズム研究」、江蘇省科学技術庁の研究プロジェクト「多国籍企業の中国における研究開発機構の実績研究」をはじめ、多数の研究プロジェクトを担当。江蘇賞人民政府哲学社会科学優秀成果賞ほか受賞多数

中国における企業管理方式の変遷は、まずソニーやパナソニックなど日系大企業から管理方式を学ぶことから始まった。これは改革開放後から 1980 年代までの時期にあたる。このような影響は電気関係の企業で見られる。次に、アメリカ企業の経営理念および管理方法の影響を受ける。これはおよそ 1990 年代半ばま

で続く。しかし、こうした先進国からの管理方法が中国企業に直接適用できるのか、という疑問から、中国企業にふさわしい企業の管理方法の需要が高まってきた。このような状況に対し、中国の研究者たちは中国の伝統文化に基づき、中国企業と中国人の特徴に即した管理モデルを作りだそうとしている。中国と所謂先進諸国の違いは、まず先進諸国では人と人の関係は「契約」を通して結ばれることにに対し、中国は「人情」、つまり信頼関係によって結ばれている。また、先進諸国での「プロジェクト」を中心とした経営方法に対して、中国では「人」を中心とする。他にも、アメリカ式管理方法は「専門性」を、日本式管理方法は「集団主義」を重視するのに対し、中国式は「柔軟性」を重視し、状況に柔軟に対応する。つまり、これからの中国企業に必要な管理方式とは、中国伝統文化に根付いた、創造的かつ発展的な、そして同時に中国人の性格に即したものでなければならない。

中国経済が大きく発展してきた現在こそ、先進国の管理方法の受け売りではなく、中国文化に基づいた革新的な管理方法を考える必要であろう。



南京大学の楊忠副校長先生。



左から賀曉星先生、福島智先生、ももこさん、福島沢美さん。



葉琳先生。

特別記念講演 2.

中国におけるろう教育に関する考察—社会的角度から 賀曉星 He Xiao Xin

1962 年、浙江省嘉興市に生まれ。1986 年、広島大学教育学部卒業。1991 年、広島大学大学院教育学研究科博士（教育学）取得。専攻、教育社会学。現在、南京大学社会学院教授。中国教育社会学会副理事長。著書に『子供・親・教育—現代社会における文化と教育に関する中日事例研究』（共著。甘肅教育出版社、1998）、論文に「中国における聾者の犯罪と教育」（南京『中国研究』、2008）、訳書に『反＝日本語論』などがある。

講演概要

現在、中国ではろう者による犯罪が注目を浴びている。ろう者犯罪の理由としては、ろう者の教育事情に問題があると考えられている。それに対し、政府は徹底的にろう者たちに義務教育を受けさせてきた。しかし、教育を受けたかどうかというよりもむしろ、ろう者が受ける教育の内容およびその理念が重要なのではないかと考える。中国のろう学校では、ろう者に対する授業内容は、通常の教育より情報量が少なく、発声練習に多くの時間を割いている。また、ろう者教師は少数かつ「マイナー」な授業しか担当できないため、ろう者教師が健常者のコミュニティの「外」に置かれてしまっている。このような状況により、ろう者教育は、大多数が所謂健常者であるろう者教師が、ろう者に対し、彼らが健常者により近づくように「支援」をし、「矯正」を行う場になっている。

また、ろう者は健常者と同じ空間で生活しているものの、彼らには独自の文化がある。その文化は視覚優先原理によって構成され、類似性によって秩序立てられている。モノとコトバ、指示するものと指示されるものが密接し、聞くことが見ることに代わって世界を認識する手段となる。仮にろう者文化に対する認識が欠如していれば、「支援」や「矯正」が文化の抑圧へと変じることにもなりかねないのである。現在社会では、様々な情報が徐々に視覚中心的な形へと発展してきている。視覚を重視した教育方式の改革を通して、ろう者教師にもっと教育現場に参入する機会が増えていくことを望んでいる。

福島智先生のコメント

ろう者の問題はろう者の本来の能力の問題ではなく、周囲との関わり方によって生み出されたものである。このような構図はろう者に特有なものではなく、他のいわゆる社会的弱者にも当てはまると考えられる。また、ろう者は言葉を通して世界を理解することはできないものの、視覚情報の吸収力は健常者よりも優れ、またアートのセンスや表現力にも秀でている。今後の情報コミュニケーションにおいては視覚がますます重要となっていくと考えられるため、ろう者の視覚的能力を積極的に伸ばしていけば、ろう者の長所を生かす場面が増えるだろうし、情報コミュニケーションの技術発展にも貢献できるだろう。

ろう者の教育方法については、自然手話と書き言葉の文法を平行して学習させ、個人の特徴を重視し、多様な文化をろう者教育に導入する必要がある。そうしてろう者の視覚文化がさらに深化するための土台ができ、ろう者が障害者ではなく、独自の文化を持つコミュニティと認識されれば、ろう者の社会的立場が向上することが期待できる。

特別記念講演 3.

日中文学観の差異について—「詩言志」と「脱政治」 葉琳 YE Lin（執筆）

1963 年 10 月山東省済南市生まれ。南京大学中国語学部卒、文芸学文学理論専攻博士号取得（文学）。1996—1997 年、東京大学人文社会系国文学部外国人研究員。

現在、中国教育部外国語指導委員会的主要メンバー、中国日本語教育研究会常務理事、中国日本文学研究会理事、南京大学外国語学部日本語科主任、教授。

主要著書・論文

「近現代日本文学：作家と作品研究」（江蘇省文芸出版社、2002 年）

「現代日本文学批評史」（上海外国語教育出版社、2008 年）

『『風雅』と『脱政治性』の日本文学』『外国語研究』（CSSCI）第 4 期、2006 年

「中国における大江健三郎文学の翻訳・紹介・研究」『江蘇社科報』（CSSCI）第 11 期、2010 年

文学は言葉や文字によって表現されるものである。中日両国では同じ漢字を使うとはいえ、その意味の違いなどが確かに存在している。なので、文字によって書かれた文学への理解、文学への把握および文学への見方はかなり違うようだ。その差異は主に次のように現れる。

一、文学への定義の違い

中国では、文学とは社会のイデオロギーの一つで、言葉を通して人間像を作り、社会生活を反映するとともに、作者の思想・感情を表わす芸術である。また、階級社会においては、文学は階級性を有するので、作者は常にある立場に立って、生活を認識し、反映して、その階級の思想を宣伝するものでもある（『辞海』による）。が、日本ではいわゆる文学は想像の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品である（『広辞苑』による）。

そこから見ると、文学に対して下した定義はだいぶ違う。中国で強調しているのは文学が社会や階級思想、政治意識と深い関係があるのに対して、日本で強めているのは文学がただ客観と主観との世界を表わすだけである。中国風の固い意識はほとんど見られないらしい。中日両国の「文学」への概念の違いはきっと両国間の文学的性格の違いを明らかにするに違いない。

二、中核的性格の違い

杜甫の「春望」、白居易の「売炭翁」範仲淹・岳陽樓記などの例から見て、中国文学の中核的性格はつよい社会性・政治性があり、批判現実主義の色彩を帯びることが見られる。白居易も『元九に与える書』の中で「文学は現実社会のあらゆる出来事を反映し、文学者は現実のために文学を作る」と指摘した。中国の歴代王朝で多くの文学者は自分の作品の中で、大きな志や理想を社会・政治・国家とたたき結び、儒家思想を底流にして中国文学が概して現実性を尊び、政治的色彩が極めて濃い。近・現代文学は伝統文化の否定から出発したのだが、文学の政治的側面の重視などは、根本的に変わらないようだ。「詩言志」は中国文学を理解する大きなポイントだと言ってよい。

日本文学の作品（『源氏物語』『枕草子』『平家物語』『方丈記』

『奥の細道』など）を開いて読むと、日本文学はなんといっても「思想の文学」ではなく、感覚的・情緒的で味わう必要のある文学だと思う。この伝統は近代に至っても、その特徴が目立っているようだ。（たとえば、志賀直哉、谷崎潤一郎、川端康成などの作品はそうだ）。また、日本一流の文学はおよそ調和の精神に富んでいる。日本人は自然に対して、現実に対して非常に従順ですから、中国文学に見られるようなつよい否定や批判の精神は、日本文学には極まれだ。そうすると、日本文学が追求しているのは「芸術至上主義」で、つまり感覚美を芸術創造の唯一の目的とし、芸術の無償性、自律性を主張することである。まとめて言うと、中国文学観は「詩言志」の文学、日本文学観は「脱政治」という性格が目立っている。

3. 理念の違い

中国の古典文学理念を表わすのは中国現存する最古の詩篇で、詩論と称される『詩経』である。漢代の宮廷には「詩経」の注釈家として齊・魯・韓の三学派が存在したが、現在伝わるのは民間で行われていた毛（もう）氏（し）の説だけで、「詩経」はこのため「毛詩」とも呼ばれる。「毛詩」の序は大序と小序がある。漢代の宮廷には「詩経」の注釈家として齊・魯・韓の三学派が存在しましたが、現在伝わるのは民間で行われていた毛氏の説だけで、「詩経」は

このため「毛詩」とも呼ばれる。「毛詩」の序は大序と小序がある。『毛詩大序』の中に三つのキーワードがある。第一は「詩言志」で、第二は六義の「風・雅・頌」で、三番目は「風雅」である。その中で「風・雅・頌」と「風雅」との内容や精神はすべて「詩言志」に基づいて、伝統的に優れている文学であるかどうか批評する基準だと言える。後世一貫して中国における詩の理念として継承されてきた六義の中で「風・雅・頌」は「詩経」の3つの内容分類で、風（民謡である国風）・雅（朝廷の音楽、政治の興廃を歌ったもの）・頌（天子諸侯が祖先を祭り、その高德を称える詩、即ち祖先の功績や徳行を褒め称える詩）を指す。「賦・比・興」は3つの表現法で、賦は直叙（ありのままに感想などを述べること）、比は比喩（似た物事に擬えて表現すること。搾取者たちを国家の食料を盗み食いする大鼠に例えている）、興は隠喩または象徴という意味だ。

また、「毛詩大序」でいう「風」は「風化」（教化）・「風刺」の意味がある。「風雅」とは政治の興廃を歌う詩で民衆を教育感化し、国家を統治する者を諷諫することである。だから、「風雅」は古くからすぐ批判精神を伴う。その批判精神は「諷刺」・「諷諭」・「諷諫」などを含めている。そうしたところに、正統的な中国の文学は、志を表わす社会・政治への発言があるという文学観がよく見られる。

それに対して、日本文学の理念を表わすものは和歌を論じた歌論と呼ばれる『古今和歌集』である。その「和歌集」は序文が二篇ある。紀貫之に書かれた仮名序を見れば、中日文学の理念は質的差異がはっきりしている。中国文学における社会政治の善悪

に対する説得性が欠乏し、政治道徳にかかわる目的意識が足りないようだ。ただ重んじているのは性情に基づくことである。四季の景物を写し、感情表現・抒情的表現は「あわれ」または「もののあわれ」という一語にある。「性情」を尊ぶことによって、日本文学は伝統的に政治道徳の働きを切り捨てて、文芸の独自性を認めるらしい。

また、和歌の「あわれ」は中世に入って新古今和歌集・連歌の幽玄」と転じて、さらに近世の俳句の「風雅」美の世界に求められた。松尾芭蕉が『笈の小文（こぶみ）』で言った「風雅」は日本のあらゆる芸術の根本を貫く一つの精神である。それは、現実社会のすべて俗っぽいもの（現世の栄華と富貴、昇格・上進）、金持ち、雑念、欲心（私欲・私利）、かたい政治の問題を離れ、造化（神が創った自然）に随順し（従い、逆らわずに）、自然の世界に没頭して、「さび」・「わび」（閑寂・枯淡・簡素）の「無我の境」を求めることである。この「風雅」は「あく抜き」（中国人に重要視される政治問題を抜き出す）の風雅で、まったく日本人の好みにふさわしい概念だと思う。理念の差異は必ず文学の効用の上の違いをもたらすに違いない。

4. 効用上の違い

「詩言志」の中国文学が効用において重んじているのは教化で、即ち教育感化である。文学の理念と効用は直接に正統的文学の特徴を決める。中国文学の特徴から見ると、①托物言志（ものに託して志を言う）。②文以載道（文を以て道を載せる）。③追求理想（積極的に理想を追求する）。④憤世嫉俗（不合理な社会・慣わしを憤り憎む）。⑤浄化心霊（人間の心を清らかにする）。

それに対して、日本文学の効用は大雑把に言えば、主情を追及することだ。中国文化や漢詩の影響を強く受けて作られた『万葉集』でも、約4500首の歌の中で自然と愛情への詠嘆・抒情を表わす歌が圧倒的に多くて、64%を占めると言う。「万葉集」だけではなく、『源氏物語』『古今和歌集』『方丈記』『徒然草』など代表的な作品にも抒情の特徴がものすごく目立っている。そして、日本近代文学においてかなり影響力のある『灰色の月』、『細雪』、『雪国』、『ノルウェーの森』など数多くの優れた作品を通して、そういう特徴が伺える。これは世界文学の中できわめて珍しいようだ。「もののあわれ」という言葉で日本文学の主情を説明するのはもっと理解できるだろう。

また、いうまでもなく、社会政治を反映する日本文学の秀作は日本文壇にはまったくないとは言えない。芸術より政治優先という文学（プロレタリア文学：小林多喜二の『蟹工船』『党生活者』、葉山嘉樹の『淫売婦』等）も確かに存在する。ただし、それはとにかく日本文学の主流ではない。野間宏を始めとする戦後派の文学や石川達三、山崎豊子を始めとする社会派の文学は確かに日本文壇に大きな影響を与えた。但し、それらはいくら社会の深刻な問題を暴き出しても、中国文学ほど痛烈ではないし、教化の働きも弱いようだ。

「日中文学観の差異について —『詩言志』と『脱政治』を終えて

エリス俊子（東京大学総合文化研究科 言語情報科学教授）

南京大学外国語学部日本語科主任の葉琳 (Ye Lin) 教授をお迎えして、2011 年 11 月 11 日（金曜日）13 時より、18 号館コラボレーションルーム 2 にて講演会「日中文学観の差異について—『詩言志』と『脱政治』」が行われた。葉先生は文学理論を専門とされ、日中の文学について造詣が深く、大きなパースペクティブで日中文学の比較研究を進めておられる。中国教育部の外国語指導委員会の主要メンバーでもあり、中国日本語教育研究会常務理事、中国日本文学研究会理事なども務め、中国における日本語教育、日本文学研究の分野で活躍しておられる研究者である。『近現代日本文学：作家と作品研究』、『現代日本文学批評史』、『大江健三郎文学の翻訳・紹介・研究』等を刊行され、日本の文学、批評の紹介にも尽力されている。

今回の講演では、日中の文学観の違いについて、歴史的な視座から比較検証を行い、中国における「文学」と日本における「文学」がその定義及び根本理念において大きく異なっていること、それに呼応するかたちで、両国における「文学」の効用に対する理解も異なることを明らかにされた。詩経の大序に由来する「詩言志」という用語が示す通り、「詩は志を言う」ものであり、すなわち、文学は作者の志を表し、それがさらに社会、政治、国家への思いと密接に結びついているのが中国の伝統的な文学観であり、文学理念の根幹を成すものであるのに対して、日本の文学は、葉先生のことばを借りれば「感情優位」であり、「芸術至上主義」であり、社会性、政治性が弱く、批判精神の発露、道徳の称揚、民衆の教化といった側面がごく限定的にしか見られないということである。中国古典のカノンともいえる『水滸伝』『三国志』『西遊記』『紅樓夢』然り、この傾向は近現代の文学についても同様であると論じられた。その対比として挙げられたのが、『古今和歌集』の「仮名序」や芭蕉の『笈の小文』、そして近代の川端康成や谷崎潤一郎の文学である。日本文学の中で限定的に政治や社会を問題化しているものとしては、小林多喜二や葉山茂樹、野間宏等の作品への言及があった。こうした「少数派」はあるものの、日本文学が総じて「脱政治」的な傾向をもつことについて、葉先生は、「あはれ」「幽玄」「風雅」といった日本の美学概念を引きながら、日本の文学が「アク抜き」を重ね、同時代政治との直接的な関係をとり結ぶことを忌避しつつ発展したと論証された。

葉先生の講演は、様々な意味で刺激的だった。日中文学の総体を見渡してその根源にある価値観の差異を提示するというアプローチは大胆であり、それぞれの社会や文化を成り立たせてきた地理的、歴史的、地政学的な要因をめぐる果てしない議論を引

き出すきっかけとなるだろう。しかし、何よりも新鮮だったのは、文学の政治的効用を問うという問題設定そのものである。葉先生も指摘されたように、日本の文学伝統において、文学の政治的な価値及びその効用については、特定の儀礼目的の場合を除き（たとえそこに顕著な政治目的があったとしても）触れないというのが、日本の文学伝統、とりわけその主たる担い手であった和歌文学における了解事項であったといえる。対して中国において文学とはつねに同時代の政治、社会、ないし歴史とのかかわりにおいて読まれ、評価されてきた。いわば、何をもって文学とするか、という前提そのものが真逆なのである。葉先生の講演は、マクロな視野に立つ比較文学研究のおもしろさを教えてくれるものであった。

なお、講演につづく質疑応答でも興味深い問題提起がいくつかあった。(1) このような対照的な特質とは別に、日中文学の共通性に着目すると何がでてくるか、(2) 近年の両国間の、とりわけ若い世代の活発な交流やバイリンガル話者の増加に伴い、こうした文学観の差異は揺らいでいくものなのか、(3) 葉先生が論じられる両文化の本質的な違いについて、そもそも日本文学が中国文学の圧倒的な存在のもとで中国文明との葛藤の中で、いわば中国文学の中から生まれたものであることをどう考えるのか、(4) また中国研究者からは、中国の農村で歌われる詩や歌の中には表面上の政治的意味合いとは別に、その裏に、ときに卑猥な、ときに多分に個人的な感情を入念に織り込んでいるものもあり、中国文学の多面性に注目するとさらに豊かな文化の姿がでてくるのではないか等、いずれもたつぷりと時間をかけて議論したい啓発性に富んだ質問だった。出席していた学生の中には南京大学の学生たちもいて、彼らが果たして川端や谷崎を、あるいは村上春樹をどのように読むのか、大いに関心のあるところだったが、時間がきてしまい、議論は次の機会までお預けとなった。ちなみに南京大学では、まず「いろは歌」を覚えてから日本語を学習するそう。だ。「いろは歌」を知らない日本の学生も多い今日、両大学の学生同士でそれぞれの文学について、またお互いの文学の読み方について語る機会をつくれば、おもしろい異文化交流談義に花が咲くことは間違いないだろう。開かれた議論ができるようになった今日、文学を通して文化を語り合う場をもっともっと作りたいと実感する一コマであった。

時間の限られた今回の東京大学訪問の密なスケジュールの合間を縫って講演をして下さった葉琳先生に感謝したい。葉先生と南京大学の学生さんたちを囲んで、日中文学研究会第二弾が企画されることを願う。

南京大学におけるアカデミック・ジャパニーズ教育 —日本語教育者による交流

ボイクマン総子 (PEAK_Programs in English at Komaba 特任准教授)

東 京大学が蓄積してきたリベラル・アーツ教育を世界に向けて発信するという目的のもと、南京大学との教育・学生交流が毎年実施されている。2011 年 11 月には、両校の交流 10 周年記念の一貫として、来日された南京大学の先生方と東大の日本語教育を担当する教員とが日本語教育に関する座談会を行った。

日時： 2011 年 11 月 10 日 10:30-12:15

場所： 18 号館 コラボレーション4

参加者：〈南京大学〉葉琳教授（日語系主任）、雷国山准教授（日語系歴史担当）、賀曉星教授（心理学系）
〈東京大学〉近藤安月子教授（言語情報）、藤井聖子准教授（言語情報）、井上裕子先生（AIKOM 日本語非常勤講師）、江崎裕子先生（AIKOM 日本語非常勤講師）、ボイクマン総子

東京大学が蓄積してきたリベラル・アーツ教育を世界に向けて発信するという目的のもと、南京大学との教育・学生交流が毎年実施されている。2011 年 11 月に本学にて行われた学生交流を奇貨として、学生を引率されてきた南京大学の先生方と本学の日本語教育を担当する教員とが懇談する機会を得ることができた。本報告では、この懇談会において南京大学日語系主任の葉教授からお聞きした、南京大学における先駆的な日本語教育を紹介し、日本語による学術交流についての偶感を述べたい。

LAP の目的は新たな学際的領域の学問を他国の大学生に紹介することであるが、その際の障壁の一つは言語であると言ってもいいだろう。現在、英語の国際的な地位は自明で、学術の世界においてもその支配的地位は所与のものとみなされている。このような時流のなかで、“日本語”で本学の教育を発信できること、両校の学生交流が可能であることは、決して当然なことではない。学術領域に対応できる高いレベルの日本語（以下、アカデミック・ジャパニーズ）能力の養成が南京大学日語系で行われていることが、この交流を可能にしていると言えるのではないだろうか。

南京大学日語系における日本語教育

南京大学における日本語授業の実施は、1975 年に遡る。開設時、教員は日本文学専門の1名だったが、文化大革命終了の翌年 1977 年より正式に学部生の受け入れが始まり、言語学、文学、文化の3分野の専門教育が開始され、1994 年

には、大学院修士課程も創設された。2011 年 11 月の時点で、学部生 75 名（1学年の定員 20 名）が日語系に在籍しており、専任教員は 12 名、教員は全員日本留学または日本への学術訪問経験者である。

教育成果について言えば、中国大陸では全国レベルの日本語教育試験（1 級～8 級）があるが、1 年修了時に 4 級合格者 100%，4 年修了時には 8 級合格者 96% という成績を上げている。因みに、8 級合格率は 35% 足らずで、当試験は筆記が主であるため産出能力も問われる高度な試験であるという。このような実績をもたらした要因の一つとして、中国語母語話者の教員が目標言語である日本語を、全ての授業において教授言語としても使用していることが挙げられよう。日本語教育を行っている中国の 6 大学調査（冷 2010）によると、教室での使用言語が「ほとんど日本語」「中日半々」と答えた教員はそれぞれ 55.2%，44.8% という。この調査結果と比較しても、南京大学では日本文学や歴史などの専門も含む全ての授業を、中国語を母語とする教員が日本語のみで教授しているということは驚嘆に値する。

学部生の日本語教育についてであるが、1 年生は、週 20 時間×16 週×2 セメスターの授業があり、そのうち、いわゆる精読の授業は週 8 時間、他に聴解や会話、作文、日本事情などがある。教授言語を日本語に徹底するため、学生は予習として文法解説書を読み理解してくるになっている。2 年次も、1 年次と同様、日本語の基礎固めの期間である。1 年次の授業内容に加え、通訳、翻訳、文学、日本語学な

どの授業も開講されている。3年次は、アカデミック・ジャパニーズの教育が行われ、日本語学、日本文学、日本史などの授業が増えるとともに、就職に備え、通訳や翻訳、ビジネス日本語などの実用的な日本語の授業も開講されている。また、85%の学生が3年次に交換留学生として日本の大学で学ぶ機会を得ている。4年生になると、古典も学習し、LAPの通訳を行うことができるまでの日本語能力を有するようになっていく。

卒業後の進路としては、3分の1が中国国内で就職、3分の1が日本留学か日本で就職し、残りの3分の1が大学院に進学するという。中国国内の就職については、出版社や新聞社などのマスコミ関係、教育関係、日系企業などだそう。南京大学日語系の大学院は3年の修士課程で、言語学、日本文学、日本文化の3つの専門がある。他学部在籍する大学院生にも、大学院の日本語の授業は外国語科目として開講されている。

特筆すべきは、南京大学では、卒業後の進路までを見据え、「私的領域」「公的領域」のみならず「職業領域」や「教育領域」(Council of Europe 2002)にまでわたる広範囲な領域の日本語をカバーしていることである。本学の日本語教育、特に2012年秋から始まる学部英語コース(PEAK)の「国際日本研究コース」に所属する学生たちも、南京大学に倣い、「教育領域」に対応できるアカデミック・ジャパニーズの育成を目指さねばと強く感じた。また、未来の学生である彼らと南京大学日語系の学生たちとの交流の実現を願うこと切である。

アカデミック・ジャパニーズと日本語による学術交流

日本語教育では近年、特に上級レベルにおいて、内容重視(Content-based)の学習を中心におくことの必要性が提唱されている(日本語教育学会 2005)。これに対応するには、学習者のニーズだけでなく、言語レベル、知的レベルに合った適当な話題の教材を選定することが肝要である。本学のLAPプログラムは南京大学の学生たちの知的欲求を刺激し、新しい高等教育のあり方を提供するもので、その教育内容はまさに彼らの知的レベルに合ったものであると拝察される。

しかしながら、そこで用いられる日本語は、内容が充実しているがゆえに、非常に高度なアカデミック・ジャパニーズであることが予想され、その全てが学部レベルで日本語を学習する学生の言語レベルに応じたものではないこともあるだろう。南京大学のような高度な学術日本語の養成が行われている大学は海外では希なのである。今後、本学が東アジアの諸大学と“日本語”での学術交流をさらに推進するのならば、日本

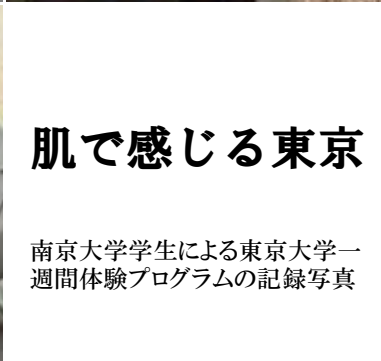
語教育関係者とも協働し、教材開発を行ったり、教育方法についての協議の場を持ったりすることで、言語レベルを含む、より多様な背景の学生にも対応したリベラル・アーツ教育の提供が可能になるのではないかと考える。

末筆になりましたが、葉琳先生のご著書『現代日本文学批評史』、主編の『新編 日語写作教程』(第1冊～第4冊)をはじめ、19冊もの書籍を本学にご恵贈いただきました。この場をお借りして、感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。



【参考文献】

- Council of Europe (2002) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment. 3rd printing. Cambridge University Press.
日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
冷麗敏 (2010) 『高等教育中の日語教育共学研究-引發学生自主参与課堂的教師行為-』外語教学与研究出版社



肌で感じる東京

南京大学学生による東京大学一週間体験プログラムの記録写真



本プロジェクトは次の助成金を得て実行したものです。
日本学生支援機構 留学生交流支援制度奨学金 (SV) — 南京大学集中講義学生交流
日本学生支援機構 留学生交流支援制度奨学金 (SS) — 東京大学一週間体験プログラム
なお、「南京 DAY in 東京大学」は東京倶楽部文化活動助成金をいただき、行いました。

LAP 歴年講義テーマ

2009 身体論

身体を魂の牢獄であると考えるにせよ、あるいは精神こそが身体をつくりあげるのだと考えるにせよ、わたしたちは身体と共に／として存在している。だからこそ、古代の神話から現代のSF作品にいたるまで、わたしたちの想像力は、身体の〈拡張〉、〈加工〉、〈変容〉、あるいは〈異形〉の身体など、わたしたちが通常の身体のあり方として認識しているものとは異なる様態の身体を畏れつつ、それに魅了されてきた。とりわけ近年の工学技術、情報技術の発達、脳科学、認知科学／哲学の深化、さらには障がい学やトランス・スタディーズなど〈異なる身体〉から身体概念を問い直すとする学問の興隆、それらと結びつく社会運動や芸術活動などは、相互に影響を与え合い、関連しつつ、わたしたちが何を、あるいはどこまでを〈身体〉と考えるのか、そしてそれがどのような可能性を開き、どのような問題をはらむのかについて、多様な考察をうみだしつつけている。今年度のテーマ講義では、これらの学問的成果をふまえ、〈拡張〉〈加工〉〈変容〉〈異形〉をキーワードとして、哲学、科学、障がい学、表象文化論などの領域を横断しつつ、〈身体〉を考えるうえで、のあらたな視点を提示することを目的とする。

出講教員（敬称・所属略） 原和之、植田一博、國吉康夫、廣瀬通孝、内野儀、福島智、清水晶子、刈間文俊、石原孝二、トム・ホープ、熊谷晋一郎

2010 記憶と記録

「記憶」は、過去を振り返り、自らのアイデンティティを確認するために欠かせない能力だと考えられてきた。その「忘却」を防ぐため、「記憶」を補助する「記録」が発明された。そして、記録技術の発展に伴い、記録は補助としての役割を脱し、今日では記憶に影響を与えるようになっていく。一方で、歴史によって過去の出来事が文字として保存され、その過程で過去は選別、編集されてきた。科学技術の発展が著しい現在、記録は量的にも質的にも大きく変化し、記憶と記録の境界は変容し、曖昧化しつつある。記憶が記録を作るのか、記録が記憶を作るのか、記憶をどう捉えたいのかは、現在再考すべき課題となっている。

本講義では、文理融合の観点から、「記憶と記録」を検討し、両者の新しい像を立ち上げたい。バーチャル・リアリティの分野から歴史を見直し、追体験と記憶の関連を取り上げる。ロボットや植物は記憶を持つのだろうか、そこから記憶をめぐる新しい観点を検討する。思想史、表象文化、歴史編纂、オーラル・ヒストリーの各視点からも、記憶と記録の関係を論じる。本講義を通して、「記憶と記録」に対する認識と我々の思考の空間を、より豊かで広々としたものにしたい。

出講教員 原和之、渡辺雄一郎、石井弓、飯野由里子、渡邊正男、廣瀬通孝、酒井邦嘉、石原孝二、高橋哲哉

特設講演 長谷川寿一、山影進、清水晶子、刈間文俊

10周年記念講演・座談会 楊忠、葉琳、賀曉星、雷国山、福島智、近藤月子、藤井聖子、井上祐子、江崎祐子、ボイクマン 総子

2011 変容

何かが形を変え、姿を変えて現れるということ、いわゆる「変容 metamorphôsis」の現象にたいして、我々はいつも恐れと憧れの綯い交ぜになった感情を抱いてきた。

そもそもあるものが一つのかたち（morphê）をとるということは、それが流動的であることをやめ、安定し、把握可能になるということの意味すると同時に、それが固まり、柔軟性を失って、限界あるものとなるということをも意味している。それゆえ「変容」は、我々が世界に対して持っている確かなつながりを揺るがすものとして、時に我々を不安に、さらには絶望に陥れるものである一方で、一つの形がもつ限界を乗り越え、行き詰まりを打破することを可能にするものとして我々の密かな欲望を掻き立ててきた。破壊と踵を接した野放図な力の発露としての「変容」が我々に及ぼしてきた魅力を示す事例は、オヴィディウスの『変身物語』から現代の変身・合体ロボットアニメまで枚挙に暇がない。さらにこうした「作品」が展開する世界の外に眼を転じてみても、生物の変態、脳の可塑性、政体の変革（革命）、あるいはまた民俗学や精神医学で報告される憑依や解離、性転換、ウェブ上のアバターなど、我々を魅惑して止まない「変容」の具体的事例の数々をみとめることができる。この授業では、こうしたさまざまなトポスにおいて「変容」とその引き起こす波紋について考える。

出講教員 河合祥一郎、谷川智洋、藤原晴彦、渡辺雄一郎、原和之、伊藤徳也、清水晶子、酒井邦嘉、渡邊正男、高橋英海、刈間文俊

特設講演 刈間文俊、渡邊正男

リベラルアーツ・プログラム執行委員会

執行委員長	刈間 文俊	(総合文化研究科超域文化科学専攻 教授)
執行委員	田中 純	(総合文化研究科超域文化科学専攻 教授)
	渡辺雄一郎	(総合文化研究科広域科学専攻 教授)
	原 和之	(総合文化研究科地域文化研究専攻 准教授)
	伊藤 徳也	(総合文化研究科超域文化科学専攻 准教授)
	清水 晶子	(総合文化研究科超域文化科学専攻 准教授)
	石井 弓	(教養教育高度化機構 特任講師)
	赤木 夏子	(教養教育高度化機構 LAP 特任研究員)
	白 佐立	(教養教育高度化機構 LAP 特任研究員)
スタッフ	浜口 一恵	(教養教育高度化機構 LAP 事務補佐)
	岩田以都子	(教養教育高度化機構国際化部門 事務補佐)



執行委員長刈間文俊先生から感謝状を受け取った雪曉通氏。

LAPはご寄付に支えられたプログラムです。ご支援を教育交流に活用します。活動の成果は常にホームページでご報告いたします。ご寄付は、東京大学基金会 (<http://utf.u-tokyo.ac.jp/index.html>) へお願いいたします。寄付申込書の「寄付目的」欄で「その他」を選択し、特記事項に「東京大学リベラルアーツ・プログラムへの寄付」とお書きください。

寄付者一覧（敬称略） 雪曉通、山崎製パン株式会社、王穩

編集・ブックデザイン 白佐立（LAP 特任研究員）

表紙デザイン TRUNK 今井幹雄 (<http://shiroshibu.jp/trunk/>)

発行 東京大学リベラルアーツ・プログラム（LAP）

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学教養学部 9 号館 302 室

TEL：(03)5465-7671（＃ 47671）

E-mail：admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp

URL：http://www.lap.c-tokyo.ac.jp

発行日 2012 年 7 月 30 日

©TODAI Liberal Arts Program 2012